類聚名物考

百廿二

和書門
二七七九八號
一一二函
四架
一六一冊
類

内閣文庫
和書
二七七九八
類
二九一
四

内閣文庫	
番號	和 27798
册數	156 (135)
函號	209 106

国立公文書館
National Archives of Japan

和歌部　十三
同　十四
同　十五
同　十六
類聚名物考　百卅二巻

日本政府圖書
明治十二年購求

類聚名物考

和歌部　十三

和歌雑證

同部　十四

和歌疑難

同部　十五

日本政府図書

疊句　雑題　重言
枕言　云懸　秀句
同部十六
和歌惣括故実

雑談
冨士の烟ゝ事
長柄の橋
かつらいまなり
海士の栲縄
鴫の羽搔 榻の搆出
なこのあ
うつ河堤
かひ屋の烟

不立不断の二意
尽と造との二説
対と仮との両義
積と持との異説
野と田町楷の車との二意
眺望と七烏との両義
現存と魔障の古今有
康大賢室 坂火屋の
三義

行合の霜
松のあひおひ
やくも立
かはつのひゝき
よこほりふせるさやの中山
鴫のはねかき
呼子鳥
かけろふ
しりすくむ

鶏と作者との異説
古今と相生の両義
八雲立八雲八重刺の三義
犯と化との清濁の両義
四時如と横折倚と中取と
十人との両義
草草とい字濁の三義
生と居との二義
蜉蝣陶巣蟋蟀の四義
三葉変とゝ猫狸の二説

玉くし
さゝやのおゝ山
よろくのみ
我よ
とこよ
いさりい行王
堂川き
あま刈むつき
えん山そうけ
このさび
九人の人乃呂

第名と好要との異説
小夜の中山さやの中山両説
我世前秋の二意有
常世と常秋の両意
秋食と朝夕の両意
立本と手付との両意
天日嗣と延喜貞との両意
此度とこの猫との二説
七人の人丸をとりて立也
九人也

すいきた
みなみか
わすれ草ちのよぐさ
かくをおく
なまぐれ

晴
湖木 辛井根樹に
友

第木と母樹とある意
木花一種の名にある梅
菜富の名説
萱草忘草名一札説
汀鶴と兵君達の俗説
天雲と雨ふきの有意

辨證

冨士の烟の事
この山古へハつねにもえて烟の立しことおほくみえたりのちの夜
ハもゆる事ハつねにハあらてたまさかにのミ烟ハたゝぬその世に
ハ実にそのためしおほかりしかけしのちハたえてもゆる事なけれハ烟
の立ことなかりしを其比ハうたにもよめりしたへたりしかはなれたるへし
○むかし延暦十一年 桓武天皇御宇 今其年のもなえ（？）比之 にも此山大に焼
焼しハつゐにそのもゆるよしありて今ハ延喜の比にハ烟もたえぬ
古今の頃にたえしかハ古へハ富士の烟もたえずといひしそのかみの事も
何かるちのしるき烟しかたちもしいひし 之

○大中臣能寛集

第ふつ十ハ生き記つけたる物きか〳〵とこえ申らハ冨士の烟之り

○古今集序よりの川をいきて世の中頃うしみきるるに今ハ冨士の山も烟こもたなりあしたのもしもつくるなりとさし〳〵ハ言ふものを今をなくさめける

○烟不立之不断の意あらぬ中ハこの序の上に冨士の烟よたへてくを恋とひてけよりて今ハ烟不立とふ下にも言ふのことといふハ今ハ烟のたえたるを以ふ中忘りし

冨士の烟不立不断之事

冷泉家二条家之の家々ふこの論まちまちなり各盛衰とえ口とをなし古柄の橋の道とふとむ人くいふをなし冷泉家ハ不断云之二条家ハ不立道之これとも今古今の序ハよりしなつハ不立とて申していふの意あきらかならぬのとハおのの法りしよく見へ人ハまさに知ぬ〳〵

○不断不絶との意ハ不断ハ使死せ人のちりしもなくたえさしむるの不絶ハ自然それなれと出あるなり前漢書九十二游俠傳郭解傳ニ所謂自殺口絶とうるはすこ同じつめ〳〵き人のこのつりしたえたるに之 解々客開ニ殺生到舌ことつるハその人を殺していまとめのみたるあつハ人の力までまとめたるにもいてもの絶の意ハあのつらしのきらりなり

○古今栄雅抄末巻　六丁　不立不断の説あり
○又按ニ白氏文集廿四春茶未断寄秋衣の句あり

○續後撰集ハ為家卿の云はれし其のあまり云ふ不断
の意を用られたり塩竈の歌に表せし一首不立の意なれとも
不二の歌ならぬ取入れしなるへし

○烏丸資慶卿口訣の前に
富士の山烟も不立あるへし何の烟もみえても思草の歌
この歌不立の意之やうに　後撰集　後水尾院様へいかに
あるへきやと伺ひ申されれハ叡慮に入しとかくハ共へしく
古へより其説あるにはいりつれとも用ひても苦しからさる
よしの仰ありしとそや承り及ひぬ

烟不立とよめる歌
○續後撰十三恋　読人不知
塩竈の浦とはいへとよそにみる烟も立すまりとまるらん
○同十三恋　新勅撰　敦慶親王家大和
人しれぬ心のうちにもゆる火ハ烟ハ立てくゆりこそすれ
又
かやのねのたつ烟もいらぬ北を人事ハ遠山ちからなかり
○此御歌二首ハ不立不断の意ありていつもかき
きこゆれハいつれにも定めかたしされと人事とす
に露つれハ不立のうへきつれ
○紀貫之家の集　新古今
たえすたつ烟をうたにせむつるてみとつて富士の山ハもえけん
これハ不立の意なれとも其本ハ不断の意ありける

○新續古今集　　藤原伊定
山賤の烟の里の名もふるく年経るさかひ小野の山本
○いさよひの記 阿仏尼讓為氏 冨士の山をみれハ烟もたゝす又の頃
昔父の朝臣にさそはれていかになるみの浦なれハなとよみし比遠つあふみ
の国まてハ見しかハ冨士の烟の末も朝夕たしかに見えしも
のをいつの年よりかたえしと問へハさたかに答ふる人たになし
誰方になひきはてゝか冨士の嶺の烟の末の見えすなるらん
古今の序の言葉まて思ひ出られし
朽はてしなからの橋を作らはや冨士の烟もたゝすなりなハ
○宗久旅日記　冨士の山烟も立すいとふりし雪こそあれて
時しらぬ山とはさしよみけん業平の千とせこゝろの雪積もや
たえにし烟をみけなるやうなれとも見えさりし
冨士の嶺の烟の末ハ絶にしを残りつきける雪や消せぬらん

○烟不斷とよめる歌
○夢想集　○拾遺集
如何樹木ひとつのこれるは秋の如何て残さぬ之乃
この歌冨士の歌なれと書ぬの説之
○伊勢集
まてハ我のみひとつの山とし立ぬ之をおもふ煙たえすハ
○人丸家集　讀人
かの国のうりぬみむをおもへとも不盡の煙に思ひ消とそなるめり
これハ不絶の意先　○後拾遺　秋中
○和泉式部
さひしさに烟をたゝぬ菅しとて紫くふる名の山里
○新續古今　光俊
よもすからさひしとは思はす大原や烟たてぬ炭竈の中

○紀貫之集六　○新古今
しるしなき煙を雲にまかへつゝよをへてふしの山ともえなん
これはすゑ久と称へはおもひはえて今は不立の煙之とも
えなんといへは未来を手ていへは不断にてあり一しき
れとも歌の意は不立これをいふなり

○堀河院次郎百首　忠寛　仲実
ふしのねにてつもるこそ久しき房前に煙をさゝぬ大宗の坐

○続後撰十二恋　京極前関白太政大臣
年をふる思ひそかするのはる富士の高称にたえぬ烟を

同　前右
恋ひ人の心のうちも我ならすふしの山ゝやたきさこれなる

同　前大納言
いかにせんかの煙のそらにきれとけむとすなぬ思ひを

同
煙立もえやまたふしの称のよそへてまれなる思ひは

少将内侍
このうたの下二首もふしなの煙のひとの八島の煙は
ふしをよめる哥をとりてたてたかく此家々の撰たれ
ともし集をれはかの家のきほつれは不断の意を用
ゐるもとりて不立の哥は此の続後撰集にも一首も見え
ます恒久の歌にこの意なる一首あれとも富士の
哥きこれは寄前なるへし

同十二恋　洞院摂政家百首
人しれぬ心のうちもすゑや火のまけてふしもそもしれ

法性寺
わすれぬ煙もけはれともえかはりてきえむなる

○拾遺集　人麿
ちはやふる神もわかひのはれはこそ年へて富士の山はもやしめ

○夫木集に　東海道紀行　又山の頂より　烟のたつ所を見て読
富士山といふところを
我名ひとつくへえん冨士のねの烟ハたえぬおもひなりけん
○芳丹集
のとかなるはこそあられ不二の山いつたえんもゆる山の
捷衣物語に
いつまでか消えもせん何と雪の烟ハ不二の山とみゆるとも
日
もえけるを神代ならねと不二の山に幸雪も消ぬ煙立らし

○長柄の橋の事
此橋ハ久しきためしにいふ事をかくなりもは国史にも見え
えたりしかしく古きと云ひこの二りの意にかけしかも
我身のふりたつをよし詠ひと新古今集の序にも人く
ハ冨士の山も煙不立長柄の橋もつくるとえ名ハ見れと家との
侍へいひしハゼん古きしと云き詠みとて不定なれ
○此橋の古来めしハ文治実録に仁寿三年十月摂津国の力よ
よりて長柄三国の二つの橋のたえ渡場にすたりひとて永居
りにせれしを中にあり捨遺集にも橋柱の見ゆつは此のこれるよしを
詠たれハ延喜の比まで此橋ありけりつまり今の事あの
都とありてハ橋体の礎ともに停められ長柄の形絡理せられ
されしハ此橋も用あらすかよう有る世なれしより後絶ま
弘仁三年に此橋維作ありれしとえてなれともそれハ文位の比
より八十代前の事にて仁寿の比迄すなはちて此間ありとなりし
ときくもれハ延喜の比までありし北古（それハ時代あるハさらなり）

○をとこよめる哥
○伊勢集　なからの橋つくるときゝて　○古今集
なにはなるなからの橋もつくるなり今は我身をなにゝたとへん
○忠岑十体に浦のこゝろとりて人もふれぬとおもひいてゝ橋も
といふ事へとは橋をかたとうそいふべし我身の元ならぬ
古てすたれんとする哉なそへ事よせてし
○藤原元真家集
こゝろにもあらてはなとへくちぬさめけ長柄の橋ハ今はさここえさ
○新古今集
年ふれはくちこそまされ橋柱むかしなからの名たにかはらて　壬生忠岑　家集注
○壬生忠見集　なからの橋
人しれすいのりしかひもあらん橋なれや思ひなからに年そへにける
○拾玉集　るそ述懐
我身をハたとふるかたも今ハなしくちにしあとのなからの橋もとなりけり

同二　治暦出雲百首　橋
つらかりけるあしの橋乃ゆきとしきてたえ思事よそにこそありけ
同三　十題十首和哥　地儀　橋
まつとかぬむかしを忘れて思ふかなからの橋のなかき一の話
同六　古今に於ける
かすかなる物も世北橋とあるもあすこらの名高きいろはちるはしも残
○古今集序　よの中の川瀬もてそ世の中にのこるゝみきつるけり今は富
士の山もけふりたゝすなからの橋もつくるなりときくくにハ哥に
のことはなつさめける
○同集　雑
世の中にふりぬるものハ津の国のなからの橋と我となりけり

○拾遺集　天暦の御屏風によみ侍りし　橋柱〔記〕のこれる
かくれなきとて　よみ人しらず
としふれはくちこそまされ橋柱むかしなからの名たにかはらて
○新後拾遺集　天暦年中に長柄橋をたてしとき
家は今長柄橋はなきをなかゝりけりとしもかへすかへす
○文德實錄　巻五　仁壽三年九月戊子朔戊辰攝津国奏言長柄三
国両河頃年橋梁断絶人馬不通請准堀江川置二隻舩以
通濟渡許之
○同社　文德實錄巻五　略之
橋とのこるかよそへて川にはよしなきかはしはよせにしは　古今元
○中務集
これるゆくは長柄の橋の名にはよもつくるせなくしもなりにけるかな

○造るとよめる歌
○夫木集　四条河原の橋をつくるとて　頼政
橋柱も今造る川につくるなりこゝにこそれもの旅人
○散木奇歌集四　年をへぬんと思ふ人の年をかくしく〔記〕やく
せきこてよめる
其ひとしていて久方の天にあまるの橋を造りしとめしも
○同
古への長柄は所をよめる
ちるかなる神代の橋は造りかへん人のかはるへく見て侍る
○拾玉集一　橋
世をわたる橋をもいかて造るへき心にかなへる所作はなし
同三　左大将家六百番歌合百首　寄橋恋
今もなほ長柄のなしは造りてん法まちあはゝ恋はなさきなき

をかしと造りたりけるする頭
○雲葉集なりしのなり　○後拾遺
くちもせぬ
道
秋ぬるハなし北橋乃ちしまりもつくるせなりけり作るなり

○いさよいの記 阿仏尼鎌倉の記 冨士の山を見れハ烟もたゝす昔父の
朝臣にさそはれていかになるとをの浦とかやにて夜深く
出てつたへしに冨士のけふりの末もあさ夕たしかに
見えしものをいつの年よりか絶しと問へはさたかに
こたふる人もなし
古ハ都にハなひきけり冨士の嶺の烟の末も見えすなりにけん
古今の序乃言葉とて思ひ出られて
いつの世のまことの藁り冨士の嶺雪たえぬ山と見えん
拾遺なりし此頃を造しもや冨士の烟も立たなりける頃ハ

かりはいまそり
いや和語のこの詞に二つの意ありかりそめと暫との意なり　又は
この支といふ意にてもいへり
○壬生忠見集　十一月山里なる女の家に親ある男をのみ入りて
世の中にかれにかれぬる里にはまたおもひつゝいりのたとまて之なり
○中務集　田の中にかりしたる所
袖ひちてうゑし早苗をまもる田を誰かはいまてかりせんといふらん
○情ヵ袖り花と雲之思ふらん中しりはかりはくるまゝ浦につなまと
忍びつゝ多くの日数をこそをしたる見ゆり
○堀河院百首
家をとりかりそのとくる菜は野に鶴なくなる草刈れつゝ
○恵慶集　田のかりほに稲かる人
早苗とりいつのまにかぬ秋の田のかりほはまたぬとやいふとそめん

○赤染衛門集 三 小式部(?)におくりける(?)をみなへしにつけて
しはし結ひおきたりし
かへるとてもぬきたるをみなへしとりてまゐらせける(?)へきよしなん禰(?)

○明りよいし皇(?)小二の君(?)に行る由 伊勢物語
○いせ集 ○後撰集 秋
秋の野の花の名たてに女郎花かりにのみこむ人におらるな
○紀貫之家集 一 ○指(?)き
かりそめて我はきつれと女郎花見ることにこそ名に流るる
中務卿(?)より 和
花の色は人しきをみなへしは我は山路をかへさにそ見れ
大輔(?)よりし書所
三
たもとれたるかりのことにねもやかひする人のかへまかつへん
かりそめの人のためにはをみなへし花もあるなとて知りける
○西(?)院家集 八月中務(?)より見ることに
秋の野にまかりてをみなへしにつけてかりきつれとはふいへしつ
○大中臣能宣集 九月女郎花のかたはかへる折るなる人の
かへして君(?)きる 女ともいふ(?)

かゝみとてもち家の人まつる人はいまださまへしんとや見る子

○清西集　むかしありける人の家に月たまはりしに
たゝみあひて顔をまもりてたりけれは
なき事共ありつるのちにまた親家をみけては人のめにとまれとあ
りけり

君に親は代ちてあはらはらとさかりなる人の思ひあまれぬ

○伊勢集　かしこなる人いふかの家此国なとちりくまかな
ふよまふてて

かしこにてまていふの見ゆぬれは神なすとはよもしとそ見ゆ子

○源順集　桜を

桜の香をかしこにてやる人やあると野への中海はたちまちかへ清ら

○藤原為家集一　秋見つひし故郷来つるをとふらひて君まつ人

かしよる人まとこゑを我なきれはよ我秋のかたひなるの家

○後撰集十六　雑二　いとまなくてこもりゐて侍りけるころ
人のとふらひ侍りければ　壬生忠岑

おほかたのうきみの事よりも頼まれかしなくさきて問人のなさけ

○拾遺抄　夜百首

年ふれともこゝろの世の中をつくつくかくなりてや今は問ふる

○夫木抄廿四　家集　高内侍

かしまさに山をかくしてこそ何今はのとふ人なかりけりなまし

○りふハかりけりきえ
○行歩朔ト
あきさきし人なりてあれかり衣　ふハりりきえ　ゑあもなくなる
○いせ集　君のくもぬへきを　○は撰集大雑四　猶さくらに　まさくしうス
雲海をさたえぬ我とくもるとも　ここなは　ふハりりきえ　なさき　つさてまける
今日ハ朝と云今日許と云の二義也　なくぬの浪

海人のたく縄乃事　擣
○今さふさこゑの事いさひりの意なりと、海人の縄をいたぐる
事なる我被ふハ潮光によせくる楪るゝもゝとせしもそこれハ其
たゝへるをなすれともそきせさ之年之へしきことなれハいうりせ
んよし今ハ二の意異へとえらくこれをはしめ
○えの意ハ縄たくるの之果利の結義なれハ浦ていふへしたとく
ハ草へて生を年乃入きをいつるも同し飛鳥井家の説にハこれ
にちさりつれとり

○清少納言記　あまのうき

さこうさつぎたゞしよつきたるわこえながいり
ゆゑとなんなのこといせきさうも行しぬづつき
ざ女りおおかげのんありど男ハのりてうくなきう
ちうしゆくこのたくありを海ますけあらしいと
あやしくおもろへさうハあしぬりやあきものば
うんとてハそのなりをとなんひくろまど
ひくりうし　さ縄でことつりたまりや

○古事記ニ大国主神云ゝ鎌海布之柄作燧臼以海蓴之柄作燧杵而鑽出火云是我所燧火者於高天原者神産巣日御祖命之登陀流天之新巣之凝烟〔訓凝烟云州須〕之八拳垂摩氐焼挙〔摩氐二字以音〕地下者於底津石根焼凝而栲縄之千尋縄打延為釣海人之口大之尾翼鱸〔訓鱸云須受岐〕〔以音〕佐和佐和迩控依騰而打竹之登遠遠登遠遠迩献天之眞魚咋也

縄をまくるといふよしなし歟

○古今集

みちのくやひなのいつれにかよるつくはまの縄たきいふらむとい

○續後撰集秋中　　右近大将通忠

難波江のあまのたくなはくるしくもみえぬたえぬ秋の夕暮

○新千載集　　寂政法師

いせの海のはまかたく縄我ならでにくひてもつるよしもなし

○中務家集　　はるかしる所

身をまかせすしはしは今もたくなは絶なくくる人はありと思へ

たくなはの長きのかはしてくるしくもかくて長き命あらん

○續後撰集十二恋　　藻云寮恋　　従三位頼政

かつきするはまのまくる縄のくるはくれともえぬ君かな

○後撰集九恋一　　かくしのさやしほまちの人なりといひ

○われハ
伊勢の海にちつてもかまちな縄のたきんハ我を惜れたら　よミ人しらす

○

○大井川行幸和歌序　紀貫之　とし比ゑのちせの来まて絶す
今を昔にくつて後のちの世をきらん人絶縄のたくなるそ
ちうく〱しもの山の峯のきのたさすしめや

○懐中抄　読人不知
かく縄をそ千年の浜のなつかしとれにや延喜の世をと思はらん

○夫木抄　中務

縄を燒なよしらむ　たく

○源順集
えりをやハかまのたく縄名のこしてた川ハ柱やし新なり

後京極殿御製
あれまくにやかまのたく縄たきすひくりかへしとめ七日雨のふる

○續後撰集十一　前大納言基良
いつつにかまのしほ大まく縄乃苦しきハ我そ人をこひし

鴫の羽がき
○拾玉集六　古今哥題
よふりくにうき枕しや我なれちちの鴫うちさえみすまり紀
○鴫　長明百首　暁
露けかりきかり田の庵の稲枕夜遊のまていちまの羽かき

○蜻蛉の花の下葉まさりたにそよりそめしけるを
かゝる時よりこし夜数をかそふるまいはしきのまへ羽も業中しとこそすく
かへりを
いりかれや鴫のはねかきかそへしつもるすかるむひかきとなりけらん
○能因集
さ夜ふけて物思ひしけき暁の百羽かきまさる鴫のはねかきに
はなまたまか 十四 まわりの浦のやとりして
○拾玉集一 同吉百首雑
月影のうすかけてみれは菓のこほりとつくなく鴫の羽かき
同岩 厭百首 雑
秋さむくして物思ふ夜のあかつきにかそふる声の
同六 羇旅
旅まくら鴫の羽かきかそへてもあへていくつおもひぬる涙なるらん
○赤染衛門集一 けちかしなりて 時に男
こひかしかりしとつむものなりし鴫の羽かきのつきせさる代
百羽かきかしなる鴫のましまかしいくなる枝にかんよとらん

ながめ　　ながむる

○詠　韻會為命切説文詠歌也以言永声増韻詠詠吟也或
作咏　亦作永書歌永言声依永　○尔雅三日以上曰霖
○今ながむと詠をながめながむると訓るは観眺の意にハ
たゞ古歌をうたふ本意をなりにしくこそ情を云
也よて詠とかかれてし是れを花年長月といふ之
よみ出しくもの長月の訓は長雨の也なれはいふし眺
望の中となりて詠嘆の意はなさがめくよ
古への歌もあるは長雨よよせてよミたる多くれは皆
嘆息の意すてこそうけし後世よは又なかめともと云
詞乃おもひやるよりひくハてる情を月乃つゝまれ
この事古と今と本末と是すくおもひもしへき支流
なかきは帰七大ひまて俗よは花めあつくあしいふ

○万葉集第十　寄雨

秋芽子乎令落長雨之零比者一起居而恋夜曽大寸

右柿本朝臣人麻呂之歌集出也

○令落ハ今この哥ハ帖第一の雨の哥として出せり　令落とお
とよ比をおとし訓ミテこの哥ハおけまそたる霖雨の
哥として猶よはふ詠嘆と銀瓶との哥かよくこそあれかなし
よりて万葉集中よくみるべし　哥まとをたる哥なし
新撰万葉集にはえらんでやるとはよしされともこれ
もはの哥りあやる哥よいはれとときこゆ

○古今集十三恋三　やよひのついたちよりしのびに人にものいひ
て後に雨のそぼふりけるによみてつかはしける　在原業平朝臣
おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとてながめくらしつ
業平朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける
つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし　三六帖
○この二首あつめて六帖第一句の字に出せり伊勢物語にも
二首ながらのせられしもちてとなり
○餞杖杖　おほえ書　杖を思ひてあつるともめぐらしめぐらして杖をは
たちしてこ宜はやまこの枝のねとてなりあやしつゞる之五句よまう
むるを年ふる武杖に七両に寄事といふは誤之六帖ニ句と引とある
引て立ちり

○古今集第十　物名
はをはじめるをはてにてながめをかけて時の歌よめと人の
いひければよみける　八雲御抄　僧正聖宝
花のなかめにあくやとてわけゆけば心ぞともにちりぬべらなる

○新勅撰集　雑五
花のころ定家にあひてまうでけるついでに僧正聖宝
すぎてをとりて当座にて花の歌よまれて　よく
はよしのかたのしれいそのこころよまんとせし
まうでける　大僧正親厳
まろ子乃日つめる若菜かめづらしく松人の小松にあへて
○今案にこの二首の歌の右はそれはそれぞれ歌
長句をよくいひたる之名ひや元はゆりけ

○拾遺り花上　ことさら月ハかりかへて西にけり　かたかたに狂もかりこめ
しれさるなるへし　こゝにハさよハけやしき所なれハ　ひかぬるさる
きをすなハかしの夕くされいとしもの(ならなく)しけく
つきしのならめのうちにおもしらん　ことの本ちかきなりけれ
くつり
いつこまなりめ比たりくし　論なれハよにすく人ハのかけ(り)　残

○古今集　第二　春下　　小野小町
花の色ハうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに
○能おもてになりめとハ心のうつさぬつきの時ハ花をおさめて物思
さ滴といふこれを花の色みにみて世ハかなといふつ問
も春花をまた見し花の枝とてなかめくらしつ花のなかめれ
いとなうりける　あとよめる歌なり
○六帖第一はしめ
かすてなかむあきてなつむる花あにハ花の下ひもいかかくらん
つましと神の〻ひちて花の日乃なかめハ　悠のつまさそみける
つましのなかめに我ハなりぬかりつきあさ春をかるかなかりして
○新古今集一　春上　　読人不知

いふことのかゝる方れハ白玉の声やさあきのなみたなりける

たちかへり我形見ぬる七夕ハ人のなみたをかしたりけり　伊勢

○謙徳公御集

よるハさめ昼ハなかめにくらされて春ハこのめそいとなかりける　春雨

○續後撰集

いつしかと春来る世にかはる春雨のあれなるめに一袖ハぬれつゝ　前関白左大臣

○宗尊親王建保二年歌合

つれ〳〵のなかめも今やまきちる三山の秋のむらさめの雨　深山雨　女房　この歌上の春歌と同じ下ハ歌合の歌也

拾玉集上　日吉百首和歌冬十首のうち

猶きえぬふるとしのくれハ年月のかれゆくまゝにかすきこゑ

同五　文治五年十二月　百首和歌又寂蓮の比のまゝ中

きえぬめの雪ともおもひくれさらし花をおもひておく

同三　左大臣家百首歌　春草寄恋

なかめやるふる雪にたえぬこひ雪に跡つけしとや

なかめする心のねよりおもひそめ雪のしたにハもえけるなし

延文御百首　眺望

さしくもるなる浦のかすみに雲と浪とのさかひもわかれき　前太政大臣

新千載集　海邊眺望　具親

なかめやる見てのこりやかへす入日のかけ清の波まつりかな

右近衛大将　山家眺望　実房

みねたかき松の下ゆく夕暮にながむれバまそはたなの末

なくさめやる

古へなくさめといへるは多く長雨に見えまくいへる事多く云事
なれきて詠嘆せる言なる故後世は眺望のうへとのこ
まる多き也くさもしはなかめの下にいへりまこと事まめ
やるもひをやる思ひをやるの言まれ遠間なとてよそへて
やりなしふすなる故見なるか是すなしこく見ゆるは後世
のすまてこの詞古今以上は見くせ見たるなれはと思ひ定と
いふ二ツの詞をのせていへる意なるをこの詞は後世の定にあなたの
と云ことなりさてまなつて

拾玉集二　宇治山百首のうち炭
なまめやる今のけぶりは大原や　せりうのあくのけぶきのすゝけ庵

同三　前唐百首　露
なまめやれ野のはなを　せ野は露こそ乃こる　をさなき荒山

白河夜七首之　継定日吉
なまめやるむさしの草のひとつ松原に　いる雲の　ちぎりにき清　資季

夫木抄五　雲恭　百首家　あ新の恍四条　好仏
なまめやる　旅人の雲の　荒むれ　紛かなる夕ひまの森

うつせみ　鎧身　虚蝉
この詞は東人の二つの古いはふは宇都宮兵まで　現身といひ
生現世の身躰にて　うつゝのことにいへるなり　後世のは蝉殻の
むなしく　世をはかなき　ことにいへり

楚詞　済江湘兮悷悢

説文　悢悷悢所解皮也　悢音式鋭反式音宅外反

後漢書卒七陽球傳亦有筆不點牘辭不辯心假手請字妖僞

百品莫不被蒙殊恩悷悢溷濁是以有識掩口天下嗟歎

かひやの事　鹿火屋

このうた藤くまいへとも鹿火屋なりと蛙ひなりしもの

なハ義實之といへとも鞦韆の東より夜かけて蛙に鳴之さる

に万葉集第十秋さけの歌に寄蛙とて朝霞かひやかしたに鳴

蛙こゑとあハすて秋の歌之

判来にハ夜秋の野露にといへる送るに道を晩夜かひやを付

のへたりハこ景にいると宮ものし義尾されハ春のこなり

鹿の肉をやけたまひ置せて戦きあるとき之鹿火屋といふへし

尾松なるきなつまの笛き遊之を故に火ともあるなり

拾玉集六　秋

秋またにまたかひやの烟たちまさり霧や立らし小山田の原

千五百番歌合　五百四番　従二位家隆　右勝

五月雨にかひやの烟たえはてゝ岸の蛍子燃けり

六百番歌合夏二

顕昭

顕昭の句に於てはよせりてかひやか下も陳なくあり

右方申云かひやか下未詳なるいく虫かひやの下そ明

陳と云右家は万葉集の秋歌にこその虫これ虫とおもへるは

東かきりす秋も霧詳なる万葉集に多く見えるに係

云陳考は撰集にも歌合にも近世にも家長の歌に證す之

かひやうたに明陳とあるに付て陳の歌にかひやよまえ人詠と

下難けり又難云陳にさ未詳人とあるは不及所法かひやを

東に見えを錯中之又陳云かひやと云も撲之の後に云内

に田舎にはかひ屋とはかひやと云云それに陳子を嗜之あ

に多くはつまる之なり其を錦屋と云之と申さぬ候不可

遠春又難云此候ないはをかゝるは卯月まりのまゝ之

独は物まかは不審のまゝ之　又陳云かひ屋法令似れは

付

法も書き玉を白なれハ青も夜も柱の中に明月の子を銅
鏡も三月も子は春之梅に不可為遠き見る方中に在ると
右梓雄　書云春の字かひ辰の年に梓暗きハ右位たる年
今かひやかなもとくるもの字半斜しく以て又かひやも春
梓しんや子とそあると存ある門に富く取る様に以右在乃
問答の状こそ正句陽のまと見え何れ其門かひやの不乃字ハ
第弐葉第二首　見え　修ら給こそ指南とハ生まれまよまたれ
集　こう前第一首ハ　折雲かひやくまに面く様房えきハ残
三之や八首第十首の秋宗の事之令一首ハ　折雲かひや
くにに鳴柱甚ひつつ仕りと法此えるも世も第十二首の
うち之是あの字のひハ山田の原に四とむ子まりもとの位空を雄
存して　前まえ全存ニ首柱の事をかまてお存の面くまあ
とやるハ事ゝの事之又かひやてハある原の書にたを三印ら

し煙を易ありしめく式ハ合排宿妓萬ハ令去携紫原なり
然るを於妓庸志假陪一百安俄君蜂出茂可為一味更而迫
此一業出英従云何のまとみゑまとの湯え帰しつけと称ハ
此事之至上に暴利をかまえたると銅屋とい之とええ逆従
や而今の問答にハ無附四客に聲を銅屋をかひやと称也
立ぬに柱聲ある事て聲を倉之と云ニ此徳正不足言致
聲巻の屋をハ聲至と云巾待る色此俊利軽居の書え
法ねも玉蒂の事の越る変に甚和子日玉まもまを持
て聲室を加ゑもひ祝ひ和るとして只聲巻の法
正月和る子年の宗生させめてを拾ひ姫と称して聲室
をとき拾ひ祝ひ和るとの次三月年日和て聲巻の風をなし
て暗きにあるめて三月年日和て書る他て四五月を前
至り旧ととめこと　此釣而式不当さし聲三割の内に何在

見月之性を含裂入して含蔵す龍宮比類著之宝中
含不可振源浪文不奇源此瑕性何因而含営役於凡帳蓬
八宗月花不可免也に営役也る故之独志書意帝蓬を守
しも花林苑と云り橋清府か性を詠せしも其中のなま
さなりれ神にも柏帳蓬の鳴不昔田花の沢や彼方万葉
の家ハ山中の田に此雁書火底の下性にまる春日串く鶴
雲と云ふも我綱之洞降に潜げる鶴雲の山孫にめぐれ
ある不異にありての家にも春日右や右方人発著甚
時之条ハ不可難るか敷只綱底をて離中なるや右方中為
何た民境風去花石傳止し数や右葉なるの我なるらく
甘ん負けし侍るる様歟

同家合　七
鳶　営煙鳶　此尚
山田もるかひやか下の綱こそ二これもやらぬ君ろ心なりけれ　寂蓮

右中云右家名称難右方中云かひやに山田もるといはんめる
條云かひやと云ハ鹿火屋と万葉にあり夏の夕山田に鹿を
よせし料に鳥ならとるさき棚をとりて燒を田になほし
料に舍を作りおけるを是をかひやと云ゝ大民もやきたる
に万葉の書様にはひ侍　又難云ふしづけ不すさゝ敢堂も
故火の詠に入れる先達の不存ぬ新万葉集に鹿火香火
と書て音定俊綱と云文字を訓せし難にぬ此書之證一
行に鹿火とハ不足歟　又陳云先達も昭の説を引て負
難信矣敷又鶴霧と定めて侍けるを鹿火烟なとの
つとめて霧ふりけるを證るまや又人丸集に　こかひ
かひやか下に鳴かはづとよめる歌を山田に讀之ーとあくまで
判云右鹿火屋か下の煙ハ両方の同意に入くて侍るー
此家難陳未決　及ふ示にまの両家の家にや情の所にかひや

の友ハ委任中任まき削して今の問答にいとも応あまた中
侍りまたり　但此右の意ハこゝにてこそ答の手あれとも此
やうぬ出りきと覚く侍れとかしやの事和なまいらし遠や
おと侍るめかたしや精細さんる雑事詳らかなれも猶頑
不ふ時持と中のし

かさゝぎの行合の雲亮　　静の行合の月

新和集十八上左　九かさゝきの日にはひの月の年

伊勢集
天しるの行あひの雲にこそりと見ヲむかくはかり
さりし

拾玉集　　永福
かさゝきの行はそぬやまも落ぬへし　今世ろすゑに任者の神

壬二集
八幡山まの橋も　かさゝきの行はひの雲の上ハ見くり

拾玉集下
杉の庵の行はそぬ月まつかり雲の　絶えもも萎も月にまちわ行

古今序考　古説

かゝるあくまてたえて後世さかりのむかしおもひしられて世にうつりつゝも
者ゝ時のうつれかく歌たえたる事を、いたくしく悔るけかりける時も家とも
てその心けきはるゝさまなるとや

古郷往考の考古説之事

古今和歌集序

此ゝ後世の思ひ浮まちかへる事といはし八
あひおもひの御名まくえれは知るも以見さまくりてし古説
またこえあれあひ方して御名も考へしもろもろ作者集之
ぬしの家集にも僻まへる家る程やまいと云れし

紀貫之家集八

人のとちとや思ふらん古郷乃花と家とや花をくりさへ
者遠くも右の人まちえし古郷の花もむかしの香なれ

紀貫之集二

いゝ住よふ歌する家古郷の中河や月の影も其てうつゝ

いろは世学者ものとこう称のまれも家なや友と思ひまうし
今撰集下 賀祈祝
あひおひの神の道より岩の竹まで八へまで家友として
續千載集 秋下 西園寺入道前太政大臣
住吉の松も家なも千とせまで行末しれと秋のよの月
夫木抄 四 後京極摂政 松間花 家隆 或夕に若衆
雅経の松の木も見のかやまま生ひ二の桜なまうし

又すさのを 日本紀一素盞 八雲立 八雲削

これは後世の考にハやくもハ八雲の雲のたつとハ八と云を讃之也ハ只の略之語ハ八雲の敷浪の八重垣ノ家語の意

新古今 藤原元真 恋集
さし そのこちたさつゆまま恋しくて雲の上に出る山ハしまし

大和物語
新和集 五十上右 又 八雲立家とす
新後拾遺集序 藤原為定 下 忠恒 八雲の道中すの詞をみかき二条
家雅着は八雲の其のすきかさし我の人也り

かくこそ今ハ忘るれ

かくこそ今ハ忘るれこれまてハ見しまゝにこひしき人をも
今はさはれ法師て判者河の言に云ふ讐歎といふともその
言なるべき事なくしてくいひつる言にはべし

いは清水
今はまたなき花とらふ風の音もとれ花雨も好
今はさはりて讐歎の言なるをめでらる法師さしそへこの絵ハ
いまそやハある哉

さよの中山

さよの中山　八十三
後撰和歌集

さよの長山

まさきりかゝるさやの中山

風俗ニ云又去々　かひかねをさやにも見しかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

云、あまさく佐夜し　横折ふと　四郡　郡なとなり　是これハ山

のよこたハるなる人の郡　なるに似たれハいふる河まもおとなり

なの御郡四郡の事ハこけとし　宋子安か試茶録云又嬉南直

東嶺極高峻、曰数頽壠東入張坑南蹄苦竹帯北岡勢横直故

曰坑とみへしれましく　此のよう云郡なる所にとなり又文選魯

霊光殿賦に嵬瑰譎詭而鴻紛峩山峙以紆鬱隆　崛岸青雲と

ありて紆鬱隆崇をよこほりと訓し注劉良曰紆鬱幽深貌と

みへしもよこほると云所ハ之

文撰解嘲揚子雲か賦　横江潭而漁と云ふ横をよこたハりて

と訓も同し　云之まゝ樊噲の傳に匈奴の中に横行ともいへり

いさよひの記　阿仏尼鎌倉下向の記　廿四日　昼になりてさやの中山

こゆ　等

こえかゝれは事の外の名にたかき松風おもきさよの中山

何々きも都て　これハ月もやまゆり

雲かゝるさやの中山こえぬとハ都に人に知よ我かの春

今案るに東家には名所ハさよの中山とのみ詠めハ

有明にさやの中山といへり何にいふ説のひとくなる文

にハ近代の名をさやの長山佐夜の中山といふ

二首並て

へりけさやまてハ佐川の

くこそ

宗久紀行　妻の様の日数も

の中山もなりぬかの

も衣打ちに佐夜の中山

いふ説のあると中納言源仲正備国の任にくだられけるに武蔵

ハさよの中山と申侍りけるとき中山の光遠なども小夜しまよ

聞れける夫木抄集とも見及ぶにて侍り　源三位頼

政ハ長山と云中なり此ことは語る事しに限る事ありたし

かぞと申しける也さよの中山と答へ侍りき

また八中まこいふと問ハ山彦の虹ける音もさよの中山

さよの中山　小夜の中山　夫木

方角抄　小夜の中山只に小夜の山とも夜の麓を新坂といふ所

にあり小夜の中山とて

昔ち茂雅宗へさよの中山もなるさよの中山さよの中山こ

いふ説らにてやまや中納言源仲正の任ませたられけるに武

さよの中山と申侍りけるとき中山の光遠などもさやまよあく

侍りてや　ここ　源三位頼政ハ長山と云申ける此度武蔵に尋

ねかへりしくハさやの中山と答侍りき

中

問　光廣口さやさよめ哉　答　幽斎

年九そ又越べしと思ひきや　命なりけり　さやの中山

是ハさや　なり

岩りまの麻子に嵐をかつしきてひとりかねる人さよの中山

是ハさよ之　聞とらる　いさよ之　只ハさや之

小夜の中山とよめる歌

新古今集　旅　西行法師

年たけて又こゆへしと思ひきや命なりけり小夜の中山

新勅撰集　雑四　宗隆

定めなき身の月日ふるさとはよそのさやの中山

後撰集　恋一　源宗于朝臣

東路の小夜の中山なかなかにあひ見て後そわひしかりける

恋九

思ふ事の序に此心をかきしるして独やねなんさやの中山

さやの中山とよみ歌

古今集　恋二　紀友則

東路のさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけん

千載集　羇旅　八条前太政大臣

さよふけて嶺の嵐の風さえて衣手寒きさやの中山

山家集　耳底記中ニ在之

年たけて又こゆへしと思ひきや命なりけりさやの中山

後撰集　九　恋一

かしこにて逢ひ見て侍りける人に

つかはしける　源宗于朝臣

東路のさやの中山なかなかにあひ見てのちそわひしかりける

今案　さやの中山と書ハ誤也　さよも中山之

さゝのを山とよみし哥

風雅集　旅　光明峯寺入道前摂政左大臣

夕暮のさゝのを山を越ゆけはまた結ふや萱か露や置る

新続古今集　旅　参議雅経

出羽のさゝのを山明やらて月に越ゆる秋の旅人

もぢの草ぐさ

こ[illegible]まさ海くの異説有(有)く世にいひつたへ百夜草の字を

取(取)くて草の字をかくしてあるにて時あり此の名ありけれ

命を延るといへる多の字なりとてもいはれとのみいへるを

物に書もの書にはてもある月令の菜を撰和名にいふ事也

さふらふ某なり某の分れかはくへりもの傾の葉

節の草陽といひまて久利を結経は数とある花また傾り

きくを借ていへるもの誤に異説はつねて古き伝へ事をいひ伝へ

草の意と仰ける万葉集にも常に折の百くさもいふ

にいふとの意をあらはしていふをいふなきもの共(?)りて

も撥ねるとこそまたある。古事記上巻集諸刀之手上血自手股漏(ユビノマタ)(クキ)

出(デ)所成神名久(訓漏云)奴(タラ)周麻加牟(?)神とみえしも漏いくゞりたまふの

ふ訓に例もある同し

呂覧五仲夏紀五日　鵙始鳴反舌無声　注鵙伯労也是月陰作於
下陽発於上伯労夏至後応陰而殺蛇磔之於棘而鳴於上
今おもふにこの説によりて按を草の茎小刺といふ是これは
蛇を棘にさすよし伝へしといへるにや
也
淮南子　五時則訓　仲夏之月鵙　始鳴反舌無声　注鵙　伯労鳥
也五月陰氣生下博労夏至応陰而鳴殺蛇於木反舌百舌鳥
也

千五百番歌合
大納言通光
さつきれハたのミし野への露にこそもずの草ぐき
去年八五月雨

こゝろなかなり　もずの草居　もずの草生
このことを考ふるにこの言葉の何一ハもずの流れをたとへてこれなるにハもず
草の生茂りてもずの尾も見えぬをいふハ生茂りの茂きを鳴きて以て隠
るをもずの草のひそむといふ也しかれどもみなさびれてものしるこゝろ
ろハ生の言葉ハあまた木の言葉なれハあとこそとくへし　されども もずの草ハ生
とこそいふへきにいふやうにもさの言葉ハ木の言あまりやうなる
もずの草ハつまり言葉なれしてあまりハいろいろいと 伝来ハ指をあまる
まて多く書伝てたゝある八いとあまりありともいつれもその家
にまもりてたゆへきや

枕館記上なるあきなみなれハかくてやむなし　あまえかとおもひて
あまりしてなるむるあとよりひしめるつきハもずハさもある
はかりし人の見る所にはかりかたのまねと俗書かれ
あたりかるハ草がくれかゝる此ハこゝろみえり

今撰集中 秋恋
まちもせぬ浅茅か原に人まちてかけろふのほのめくはかなき恋
夫木 秋二
風ふけはなひきしはよる夕暮の山の岸根はかけろふもなし

かけろふ
陽焔 蜉蝣 蜻蛉
この語に四の文字あり 蜻蛉ハとんほうの事 之 陽炎ハいとゆふ之燃
蜉ハひをむしなり 物によく似たるもの也 のきとも見えかくして詞
以遠にかよひてあるなきかなくし 又 かけろふの影見えて
りうしかつらのみゆる 三氣も中 詞あるのたまさかに 見え名
の象に見ゆるを 也 説 三論説 天文類聚 名番しと見ゆ

今撰集中 恋
月影のさやかにみぬかけろふのありえて恋わたれまさ
[illegible] 也
後撰集 十恋
かけろふにみえしはかりにや浜千鳥行へもしらぬ恋にまとはむ
よみ人しらす
同十二 恋四 [illegible]
かけろふのほのめきつれハ夕暮の夢かとのみそ身をたとりつる
同十六 雑二 読人不知
あはれともうしともいはしかけろふのあるかなきかにけぬる世なれハ

○夫木抄七 春六云 久安百首
ぬれ衣をほすかけろふのたちもとる かくや山
同八 夏 建長八年百首歌合 法印実伊
かけろふの夕さりくれは草のあたりの露をみるかな
同廿四 春の淡雪のうへ 従三条 入道実白
かすみの春あさ行かけろふの中にみえ極めし世の中
○
冬きてもかけろふのあるかなしかの世をはしるらめ

徒然草上にいはく あたしのゝ露きゆる時なく鳥部山の烟立さらてのみすみ
はつるならひならはいかに物のあはれもなからん 世は定めなき
こそいみしけれ 命あるものを見るに人はかり久しきはなし かけろふ
の夕をまち夏の蝉の春秋をしらぬもあるそかし
野遊上一 春花子 遊糸 蝽蝣 蜻蛉 野馬 陽焔 なとの
字をかけり 又茅をかけろふといふ事もあり 林希逸
荘子口義云 野馬遊絲也 水気也 荘子 莫所謂落花遊
絲白日静是也 蜻蛉は夏に出て夕に死する虫也 陽焔
は弥法の十喩 詳本 詠陽焔喩詩 荘子疏云 野馬遊
気也 又云 天地間気如野馬馳也

みつわくむ

今考ふるに此語は三歯交とかくべしとまでし老人の歯のぬけたるかさなりもぬけてやつれ上下の歯の所々に残りたるが上下互に交たる也ここかしこぬけて大方相交といふべきなれども上下の人みな老たるといふ中古の説に三輪組とて輪を三つちがへて指に掛る頂とのへ此との出所いかにも未詳なるをよしといふ其古歌自然のことは聞かざれども此事を按拾の書あるによめる和歌萬葉集等の古ことにはあらず此事の説いと詳ならずして此の事を一たび輪のことをかくるはいふ

（古事記古書老人の事を言はん）

をとる言の輪といふは世の事をいひて古事ときまりし世の事は三輪の事としてよみたるもいへる事し此は古のことなり

○夫木抄七 菫菜 百首同門里菫　源仲正
如何とかはる於川里の春こ前庭すさひ出の子供の中菫とる人有
○拾遺集 むまきすみれ 任子も前ぬこつくまむまき
そまかて 桶をかりまけく 此ものゆきまかりしをいふれ
まさしかひくるかとなるおりくかはく あとりくいふとえとかへる
に名ろき 拾遺有りと人の名そたる頃をまむいろ難し
それを拾遺集とみて 桶を岸まおきて かれハいはそいと
りくいはりし ともかきれあく あまいなむとむ
むきそかしらの菫ハ白紙の云をふむやれなりけりなる
○後撰集 十七雑三 筑紫の名州とい所にて 任せてりけるま
大宰府京具範 紀居のまかりけるつるてまねえ人とれて
こうきよりそこにひ侍りけれハ加て まそまま侍りける

年ふれハもとすみれ草も
かくきまきことくのむめまき人侍りける
ゑひのきみの姫

同里のわさる家　夫木抄雑十二

こゝろぐひのみ たゞのこるべきこそ おぼえぬ今も思ひ
わすれなバいと悲しくて後の人に知らせまほしく侍
こゝろハ階歯そ 歯の白くなぞやくらき[illegible]
定評ニ並ハ難[illegible]の如しといへど古今帝王ニ摺[illegible]
[illegible]も法[illegible]の[illegible]
[illegible]ニてハなかりし[illegible]も[illegible]て[illegible]
むかしを[illegible]ハ[illegible]の[illegible]
それを階[illegible]とい[illegible]この[illegible]
又古今ハ白川のとし[illegible]の[illegible]知
[illegible]後撰集ニ出
いにしへの[illegible]
伊勢物語[illegible]書
[illegible]
[illegible]
明和庚寅七年九月十三日 [illegible]
[illegible]

玉かつら
萬葉集 蔓とも 鬘とも 二つあり
玉かつら実ならぬ木にハちはやぶる神ぞつくといふならぬ木ごとに
あらちをの[illegible]
玉かつら花のみさきてならざるハたがこひならめわれこひ思ふを
後撰集ニ出 [illegible]
伊勢
日をへても[illegible]玉かつら[illegible]たえぬ[illegible]

こおよ

新撰萬葉集三　のよのなかにふりそめし　八々　千世万代の二言也

ちよろつて　万年へはひの千歳けと　千代とハおもふをハよむ

とこよ

常ハ毎言の常世の　そをいふ　常代同しことの　ことなる床ニ云

是しハ常代の言なり

新撰萬葉集一秋歌ひし　きく聞てもあるを　そうつるはひる同人

かりにやつる人のこころと麻たのまれハまを秋風にちらひよう　ヲ秋

うし　居

秋風ハかりのなきれ鳴りしきつと雲井ににかりハすん

常行き

毎言は一八に出て　たつきもしらぬハまよふかな

となへしむる　あはきをいふ　万葉集に古歌の今なりも

しらぬとして比言まて　似に云ふかなも　常といふ　似かり

二つにハ　言をさくをいふ　たつき　樹木之似にハたつきと

云万葉集まりき　をつきの　似に　たつき　つきの木といひ　柱にハ

もまれ　残に云ふむその木といふおもし　たつきて一本の名

まハ村よ　ひきまといふ　樹字をもまとも　寄ひさえ之

くえきぬと　いへる　まひハ之　氣の言をも　いまひや

○

ときこころのたつきもしらぬ山中におほつかなくも　呼子鳥

比言おもふ　いれつきハ　萬葉集まて　常の木の　麻つ阿に

思はまて　め、古思ぬと　いふと　いたとも万葉集に　古歌

の　ありつきも　しらぬと　あるのとハ　何とつハ解へ　其山中まハ

本哥の心ハ花ハ手折りてこそ見るべけれ 梅花も只遊
出てよろこびあそぶ事を云也 人見るべきとの事なるべし

新古今集
青柳の糸よりかくる春しもぞ 乱て花のほころびにける
此歌の心ハ青柳を結ぶの心を 春の来ぬれ
ばなるべし

なるひ法き

天津日嗣　繁貞
此詞ある事ハ 天津日嗣とハ天子の位を申也
御世々の世々と申ハ 総事の事也 皇統を嗣せ玉ふ
後鳥羽院 帝王万歳をかぞへ給ふと也 中原師光
神代より今日まで 天つ日嗣の祖ミ 天下をしろしめす
かしこき御代を云へる 一以治人の政 是ハ万世不絶
也

えびすかけの事

このすゑのまつこそまことは 或人ハ此夷の人ハ夷の弟の中ニ弟子か（えびすの事 恵比寿）
やうやく久しく為此ハ打ちえたるなとハなきものをひきよする或人ハ
夷ハ秘をたてまつれハこれを打ちよするなりたとへハ竹をもて
いつまでのまつりにめでたし
常陸の人の語りしハ夷の前にて鵜飼多く夷のまひのや
しき君の築てえびすの像をまつるを社にてそれを荷ひ
おはりまつて家々を持ありく東方よりまいりたるよし
まひまひと云言にえびすかきとも云ふ是（是）又何きるまいや
と云は上人に作られき 昭和五年正月のこと

このこひ

此様と今夜とふたつの意

このこひ 夜と様

東路集三特石山にまいりて日吉にもうたてまつる
名ニ様の歸を
待つまゝ様とハ居て夜ひつる其をまちかねたる様なる之

あかりにかみ居別　○野呂明宗君詠上
あ人えあかりといかりとすいかりとすや
と越すとりて波しなれきを尓あかりと子
てけゆみべまきをいかりとえりとれ東の
あすの りかえ えまとま はりあす一すえ

石川朝臣人麻呂
○續日本紀　三十三　天宗高紹天皇　光仁帝　寶亀五年三月
甲辰正四位下春宮大夫右衛士督藤原朝臣是公為
兼式部大輔從五位下石川朝臣人麻呂為少輔　○同
巻三十四　同八年正月庚寅朔戊寅　從五位上石川朝臣人麻呂為
伊豆守
加茂朝臣人麻呂
○同紀　第卅三　光仁帝宝亀五年三月癸卯　甲辰從五位下賀
茂朝臣人麻呂為上野介
陽侯忌寸人麻呂　陽侯史人麻呂同人也
○同紀巻卅四　光仁紀　宝亀八年正月庚寅朔戊寅　外從五位下
陽侯忌寸人麻呂為東市正

御炊朝臣人麻呂
○続日本紀巻八元正天皇養老五年六月辛丑
三使連人麻呂
○同上巻十二聖武天皇天平九年二月戊午
酒波人麻呂
○同上巻十三聖武天皇天平十二年十二月甲辰
阿保連人麻呂
○同上巻十七聖武天皇天平十九年九月乙亥
山口忌寸人麻呂
○同上巻十八孝謙天皇天平勝宝四年春正月癸卯
阿倍小殿朝臣人麻呂
○同上巻廿八称徳天皇神護景雲元年正月癸酉
右のこく九人の人麻呂ありといへとも一人も生年のほとハ
しられす七人の人丸呂とせし事もまた数人ありぬ之

このはな
古今集の序にみえし 難波津にさくやこの花といへるうたをさ
諸説ハ 此花とハや 一物の名にハあらて 唐土の花をいふとも
また八梅花なりとも又ハ葉菊之とも いふ なとのせなり
○新和集廿二上 十一 このはなの事

かくをなと
作男ともいふ俗説にこれは和歌の浦にてそのみちにくらき者を
云し太布の男は布はなくて衣はなし其故に男なるのみならは作男
はとつふハ之より例なき方を言ひてなくて作のよき也
達ハ汁の布のまくなりときつふ有まそれも有まとふハつ集のかう之
なの歌なりといへとも未考

○和歌のうちに独言これハかれこれ若覚えてさして抄経にいる

○金槐集上 海道千首
夕つくよ汐みち塩あひの浦をさしてなくは志賀のかくれも明けかる系

○大鏡

○第一 醍醐天皇これ此ときそう　村上の御在位の末のおそ
しかし指信申けむのことちひ序より　いひき世のかすきことお
ひやめ中将和歌つくりまうつかるより申されけ
むとて世にこよひかたりけて今の有きもんの世まての月の影と見て
とまむそれしはゆへし帝の出家しまさく兄弟けるさしに
いまはいつもとも為まつりハ方国も保しとも世の月をもろとも
こをなきよ

○今昔に和歌それ御句かこしこよひかたりきハ叔さま
あたて少叔の院すのこときき月影とハ保すけたと下ら
月影をるへしなるていハ大の誤きや　法製ことたまる
らハ方鏡

○恵慶法師集　春部　　○未来抄云　春雑
○草よりいのちもみしたえぬれハ鶯のなきとそもかりそけり
○曾根好忠集　三月今日卯月一日　○未来抄云　春雑
さくらつきすきさせさすれ春の子忌てさき鶯なき　なきなりん
○万代集
いましなる布留の都の荒れたるのこきなかにも余君あそあ
新六　　鶯
年つもる沢辺のふるすすまれハ
鳩ある枝をこまりに放つる

○未来抄
第一
○永徳二年正月庚申披講　題　赤染衛門
いく千世とかきらぬ世すらにすむかしてかすかの杜の小松をそ引
○万葉集　春雑部　万葉八
春山のさくのさとるまきかに菜つむ妹かしらひもとくらん
○家隆卿集　雪中　修理輔
君をこそ浅沢のらてをきらふしつれをかかみのおきそあさなく
○万葉七月の七日御宴歌の時（七種菓つかはしとて　修理輔
ともしこそいつきなてすそ雪あくられさつミし道てもそともこそあそ
道し
ひさしうきとくつることあそてつこゆきつてあらふねせらハ
あまれのなる
○日　土佐院小宰相
ふる雪も若菜まれて鶯のねもあさそれなる今やつもらん

ち
千種 拾玉集 いろ〳〵の身にすむ理の下哉

を
荻 千五 おとろく人哉
小倉 拾遺 荻すゝ風をてふ八 津守国基

そ
杣人 そ 世をすてゝ[illegible]いつくの[illegible]杣[illegible]八[illegible]杣人 雅世

寿四
○文応元年七社百首 民部卿為家
花さくら[illegible]車の[illegible]をやる[illegible]
○花見帰とて[illegible] 西行法師
山桜[illegible]の[illegible]の[illegible]人の袖[illegible]人
○寄花[illegible] 基俊
[illegible]山[illegible]の[illegible]
寿五
○[illegible] 大江匡衡
[illegible]六帖[illegible] 光俊 ○新六二
○帰
つとめ[illegible]の[illegible]

第六

さゝれつむ梢のおかされ老さへてあかゝこえてまこふときらきや　一数

家集　芸　修邦

家集　山吹　権僧正公顕

あらしまたて見えまつあやしまゝ吹山吹の花

弘長元年法百首　山吹　衣笠内大臣

行末ハ八重さく波のかよふらし法実ぬ岸の山吹の花

家集　修邦

山吹をかはしまきし色ハ光度々まさ大弘のやよりの花と見ゆ

第七　夜

家集　夜ゆき　源仲正

夜ふかき二夜の床のさよりなりやはりハ八月夜の中すへて見ゆ

建長八年百首歌合　夜寄　従三位行家

郭山北かへるの声すおなきこゑする森の月にしきしらなり

新樹　百首歌　慈鎮和尚

いさゝ見え夜はあまの二見まとれ思ひ出る卯の花の里

家集　夜の初つゆ家のゆきまと見えくる若葉新居

老まさり庭のこゑきの本はまれこそあるとまさる卯の花

堀河院御百首　卯花　修邦

卯花も神の祠にまきしときえて里とふかさもなえまゆふかけてある

六帖題社まゐり　権僧正公顕

さみだれはまさるの白雲の行けてしらぬ月のあなたの山ぞひさしきよ

家集　神祭

まさき本の白ゆきぬつるそ　芸て　まさき老けるぬまこゑ神祭る之

葵　続後拾遺集　後京極摂政左大臣

かつあかね神の八社つる遅き人のかつく神まきの衣のかゝる

二葉葵八十月夜のところ生まさり尾ろつときこゆる八千世

き衣をつゝみてとてよめると云々

早苗　文治六年五社百首　　俊成

かもかはのみなかみとほくさなへとる田子のもすそはほさぬなりけり

早苗無一首　　為家

たゝかきも神のことしろすゑはなほさなへとる田子のやまとなる

小倉山たちのきのまへにある早苗とる田子まことのたゝ

早苗霧中　　神実朝臣

さけ田子のかさのはなのまとにさみたれの雨にぬれつゝ

家集　早苗　　信教

みるのいかにとまりかはよそにしてのさなへのかやもいそかし

堀河院百首

初苗とりそめしよりたまかはのまそこのさなへ田子のかそえも

古今　小野集　　信教

菖蒲ひくこぬまをとめれはすてにみやらふゆふへかな

武衛庭にて五月のあやめをなかめて　　武衛百首

花の露をまた月の花にをなしとこそ

千五百番歌合　　後京極摂政

なかそらにたえてふけのこゝろに人数そのゆふくれのあやめのねをなけぬ

古今集　菖蒲　　信教

こゝろさしふかきぬまにもひかれけりあやめのねにまされるの

百首歌　　慈鎮和尚

のきはのあやめこれをかぬるこゝろすゑにもかさなるかな

五社百首　俊成

共保元年

こん年やたれのうちもへかさる菖蒲のすゑたゝしけん　閑寂氏

第八　夜郭公　　　　能宣朝臣

歌（見郭公）たえしてなく時鳥　横雲とたえ百敷かなしき
此歌ハ露霜の夜の中山の行　まして　なかれける越前の
のよみてとれ　時鳥の声をきゝて　きえかたよりよみたるとなり

百首歌　　　　　　後九条内大臣
月影のいてまし山の木のまより　扇をかくる人やまつらん
　花ハ清見守浅芦中　君の言をとれ
五月雨　　　千五百番歌合　　左大臣内大臣
五月雨の雨後のかきりける　日数へて　あさきの花のさまきを　不成　さびしき
橘作　家集　　　権僧正公朝
花かけ時のあしき人舞さす　ちりきぬ月の数見えうき之
鶯　家集夏　新作　　　源仲正
暁ハうちはかる須まの宗ともへて　まつ月につゆ　よるの夜也

鶯　　家集中　　　好忠
千引の岩百代経るとも鶯の　なきこゑ好と見えたる
夜雑　言葉上半　若夜雑中　　好忠
庭まきる時まてかいるを見やしけむ　心をかしの人と見えつと言へり

同殘
第四

ことしより 春しりそむる 年
さくらはな ちるといふことは ならはさらなむ
○哥云 桜花を さくらは 残してこそ ならんといへども 今は
開けて 初めて花をさかすにはあらず ただ何となく まづ
ことしを 始めて 咲く花なれば かくいへる也
まづ花こそ ちることをも 知らざれと いふ心なり 又 名残の
○或人云 ちるといふことの 道をも 習はずして 惜しむ 心の
ならはせよとや
○後の事 ことを 修する 心 聽の事 見えたり
大訓 なるべし とかくに あやまり なしといへり

第五　紀友則
はやまた八重の河原の桜花 今は ことにて 見るらん 涼しき
○哥云 はやまた 今日 八重 まれなりと いふなり なり
更に 花をそふ 風の 色は とにかくに 見るべしと ぞ
唯 ひとしほ 雨の ことに わけて 袖に見えつる色とも みる
○哥意の こころ かすみの 空の 色のみ 見えて 八重の 花を
せつなく 袖に 見えつる 物とも 知られけり の 色まで 見るといふ
とまりとて 心よく 袖の ぬれし 色なれ

第六
秋の野の 露かく 袖の 色か そめし 人 しはしや みる
○哥云 露に 置く心 露に 置きて らるらん 袖に
めでたき 白く さらす 色を 見る 時に 夕暮らしく 見えし けり
○哥心 名残 歎き 悩み 花とも 云ふ 詩の 句也

六
慶
女郎花さる此名高き思初るハ何ゆゑ君が―― 三条右大臣
詞云 まさしく女郎花のかげにあやしのそれつゞき女郎花をおし
あやしの みなかにもまさしくさ
○女郎花 といふ名の名高くぬ 其意ハ 之 様のめで
らハといふ外ハ無し

第五
秋の夜をまどろまず明るき君ハ萬葉集にたまちの其事
○おもとろまきハやハ久米路の橋にかゝるあき夜
のたのしもなきと之一言主神の久米路の橋を渡
しかねらのなるより久米路をかけなき事なし之

第七
妹がひも解とむすぶと立田山今ぞ紅葉の錦おりける
○おもて上二句序之紐をとけバ時ハ必立とよむハ立てくる也

為之 或説妹の紐とハ袴の紐之あり方のとし 萬
まふとても立解とても立といへるとてかくなよりと云々
七月七日 牽牛のたしなりまれのハ
紅葉うへり おもしろき 八代集ハ葉くれ子と共の所にし雲か
○おもての たのしなりのたるとハ錦をたると云之こなりし此
男とも雲の様子紅葉のうへをたる云之錦を所にあそく云
又ならと云説之紅葉とまとめにするやうまたなき男を
雲の様子なしして紅葉に示しと之おもきぬるといふ事也
多き説と知れ之

第八
神無月時雨けりハ降まして いきさてまさる方とる衣
○おもて時雨ハけり 時雨のゆとなる之 おもきてれハ何難き之 時雨有ハ
立てのやうにまさるとハ降らせ方とるとも紅て降なとし之
○後日世の雪輪不やかてハ難き事なし之

○後撰和歌集

第一 春上

正月一日二条后宮にて白き大袿を給りて 藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる ○衣部信之

第二 春中

貞観の御時弓のつかさ[illegible]つかうまつりけるに 河原左大臣

[illegible]

ちる[illegible]の[illegible]

第五 秋上

[illegible]

○[illegible]

○[illegible]年とは[illegible]之一年とは[illegible]

第九 恋一

まかる所知らせず侍りける頃又あひ知りて侍りける男のもとより日比尋ねわひてうせにたると思ひつるとなんいへりければ 伊勢

思ひ川たえず流るゝ水の泡のうたかた人にあはできえめや

○今案に[illegible]

題しらず よみ人しらず

[illegible]

年てこそ年へにけれわれハつらけれはさやかにみえし
みをつくし月日をさへをハ指の数へつゝきぬる 何ニ数へ
返し
月日よりも数ならぬ君こそ数ならす思ふ哉 返哥ならむ
○今案ニ此哥何のゆゑにしるかし 返哥
数字ニハ上ハきこしめしたるの詮ハ佗母と物
の諸等也と見え給ふ

露きえて
ともきれハ数の外ハしまれ後人の家とかなさむ
○今案ニ是ハ後の事と言ひし時の事まや けの物
まも ○都経てめさむしての之ゆふてへしハ露を
玉とひとつく ことゝハ思ひまれハ人の事なりける
とつく

人をもひそめて猶えしりてりけれハ
これしけ君か親めしこそ葉ハ初の一事人々おもはれ
○露まて数まつくしつゝなめしくさせぬ
まや
思ふ人待ちかぬめに物みえかたしけれはつかしけれ
ハつかしけれ
男 思ふ人思はぬ人の事にハいつ見えぬもとしいひて
返し
めこ有りしの事も下露の思ひもや このさかさひさかす
○思ふ人ハめの思ひ夜人まや思はぬ人の思ふ人
ハあるか思はぬ人にて思ふこそ事の思ひもすくて
なからぬを思ひハさらぬ人をもめの事なれ
を人も思はぬ事ありしとまハ事あるにつきし
思ひ思ふらんと人事にや
や

第十　恋二　　清正母

二　みりとんぬ君か雪けの雲ゆゑ（さえ）袖さへとけぬ恋しまする

○これは解ぬと云ふは又雪けとないふなり

月をあはれといふは忘するといへのまれのは

三　さりと後にむかしに於いて月をあはれは忘るる

○古今文集此恋之

初　ながむるのがれとも世をうきものいひけり　古今代ふる

よそながらもいふ人のみなのぬらぬいと　いへる人のがれとこふ

○此歌は家伝集此中務原伸文集にまた

男おもせうれるは　左京と云ふいふなり

ながし　らよ　　大友黒主

白波はよする磯まとこく舟の様とめぬ恋なる

○伊勢集に此のこ文とはしこれをかかする

まよひたにも所々なるとなど

西楠部居ふのあひましめそつ遂よしも　次是は友なと

なり　　清正母

みりと常ぬ君か雪けの雲ゆゑ（さえ）　袖さへとけぬ恋しきまる

○此は降解ぬと云ふ下に袖も解ぬとかきてはいひ又

中よも雪解といふいふなり

思ひてかすいもりなるものことより　哉紫家持りて見え

まかなるは　持ちも持ちぬ見えつなるは　　之言政生

ひらと忘き山なれよす忘きて　忘ひたきよきを此こそ於く

○然沖に云延喜式第二十二　式部式云諸国華を山

等後ことは此家を山なるを求む　夫山持と見いふと此

さ山後此たくひそ夫山の故を持ちさせなれとみ

今おふて京なは　夫山家の持忘とみ持忘を持忘

と此家京をなれそ　以之てふとし　夫山持なは

ものなきを此こなくよりに　せぬ上の向かへこそみきし

月ハはなれぬをいふたつみれならいかのはなれあれハ
よみ人しらす
引ちらしのこゝろしきまれおもふて月をはなれぬく忘れたる
○今案するに此歌中務集に見えて詞書中務か男
の忘ひて来てかへれて又まて月いとあはれなるを見
てぬすみとそいとくちをしけれとすなこするむれハ
男いかなるをのをとこへハ
ひとり寝の
とこふるゝ入ける月 造るや兼芳
東宮宣旨
人をおもひかけてつかはしける
をり年なにたのむをおもはくみてそむなしきことけりなき家をしるを
あらそひの
造
時にせんとにかへる人はなの家のむなしきをいふれとなん
東十一
恋三
恋しとはさらはまもいかなし世の中の人を人ハそれとおもへとなん
よみ人しらす
造
下かはたれしとすまもとけることかなるまことな はなちたる
東十二
恋四
あひおもひて後いはる人のまれまたのこゝろへたれハ 伊勢
さとつてもうけしての月ハむなしきつきすらも好みのみなる
あれこそもまれ月ましけりかたのみにひとつおもふまちけれ
さうなことおもひつゝうしてみれ後りて制し 業平
はれハこそあひ後りて
はぬこともかゝるの思ふえもえてし落るあまきことなりてのちの心
源し の翁居
造
香指此実とあらはれ余なれハ造にてふらん入いてもしらけれす

返しとふらんのこを賦り

人のもとにまかりて帰りつかうまつりける　よみ人しらす
侍りける日若き女の宿に通ひて侍りけるに逢はぬ事を恨み
たりける女のもとにつかはしける返事を見れはかきたへにけれは
まかりける人をとはせてなん久しう見えさりけれは　返し
逢ひ侍りてねたう遊ひの道にまかりて来ん日をつかはしけれは
かひなきこと　よみ人しらす

ちる花の色をもしらてなけきつゝ心をつくす君にもあるかな
きえてこそつゝみはてゝ後そ見め　たのめし
ことゝひて侍りけれは
いはれぬことをいつはりたりと世の中にいふ人もなし　たちかへりて
思ひかけて人のつかはしける　　　　　　藤原敦忠朝臣
あふかたを思ひ知らせてたのめつゝ恋ひわたるらん

人のむすめを思ひて通ひ侍りけるをつらくなりにて久しく侍り
けれは消息侍りける返事に
人とはゝいまはのよそに忘れぬる時雨の人の音のたえすも
侍りけるに返し見せしの返事

第十三　恋五
しのひて忍ひしくたえにける人のもとにつかはし
ける　　　　　　源英明朝臣
伊勢の海の塩焼きあまのいとまなきいとまなきこそ恋しかりけれ
　　　まことかたき語説なし

たのめて侍りける女のもとよりまかりけるを見ていひ
つかはしたりけれは　　　　藤原為世
逢ふことを交はしあへるよしもなき名にあまたつ

男のひかむるけしきなかりけれハ萱をかりたる時この男の
なやみけるに萱にかきつけて給ひける　よみ人しらす
今よりハかひなきこれハまさしくつこともすきし
あさまてふ名をこそ忘れ
わすれ草忘るとも今ハかひもなし　ねふきてふ名を
かけてたのみしこの家をとれり
忘れ草わすれぬ男なりけれハ　よみ人しらす
老ひて行身の足をたよりとしなれて家萱をかりたりし
万葉集

詠萱花
かくるたつ世にはなれし君は萱をしのひつゝなかのよみ
追門の又ゆきとこたへかけしの萱に
年をへてさくらふかのつゆもなきを給ひたれハ思ひける
菅原道風

萱草に一そへてつかはしける　清輔朝臣
かはらしな萱草こそうつろふを待君萱も色と見えなん
君萱花
かくはかりこの種にことなせハ身に伝へけれハ
あやまれとしのことなせハ萱のはかなきを見て云々
この詞書あはぬ萱にはかなきを
第十七　恋六
みちのくのしのふ人のことはいふといへ　藤原中文
ねのひ(?)は萱をもとめる家に帰る人ハあまりしき
第十九　雑二
第中言宣旨領大臣の家にまゐり出てあまたか
の家にこもれらくり今しといふまゝ見え侍る

このまた宮ゐせよとやほとゝきすの声を忘ることなかれ
宣旨
返し
ほとゝきすの声を忘れぬさけぬへく この山ともりてまつもきゝけり
後太政大臣
第十八　雑四
題しらす
いさら川ハ袖よりなかれいとふまとされぬ身ハうきぬ
人の舞の今またこそといひてまつりになるおりこそ人をとめてなましまうてこそかれの
かすのひとをとりてかくなんやなとおもひつりける
今こんといひしはかりを命にてまつにけぬへしさくさめのとし
伊勢
返し
かきるなき身もこそしらしあはてまつまてまても
つまよりもなき名立けりかれハ

ちりにたに成なきまゝに百敷の人の習にまゝすともなし

第八　冬

題不知　　よみ人しらず

年ことに来ぬれとかれハ花のこゝろもますらふ志ら雪

何をたのめしと詞に何を此花を見まするらふ石なり

やといふまや

この様の年の始まりにたくさハ若さもや明えしなま

三様の事をいひていふ

又こなたとおもふ過るなふしまてさりて若きまれ

第九　恋一　　喜撰二五

源氏不まゝ石過ひまくりはてまちかくハまかふ也なり

終りみれれも様の様氏なりおふきを先何なきて

つかり　石

まとろまね　様まも人をこそ我まし都見若我夢

様の何の事をおもふ

第九

めのもとまつかり　石　　よみ人しらず

我上祈おひなく源氏なきても人をまもれ見石まね

石過

いのりたこゝろまさまてらふ[illegible]おもかけの見ねハ

○源氏祈まりいふかしみ我称をこゝろのことする

いまさまなれま

○東海道名所集

第一
正月に紫宸殿にて桜しもとに咲人の ならしま
いかなりし桜のさかり此わけもたかことたまと呼れぬ
久し 学者
思ひて ころ さひらけきま 此路に来とたまのおもはる
花の姫君とすえ さむし 此石ならの石あとをきさ経て
まてるまて君の庭の石こそは あたり引てとり

第四
山里ありけりしに道の人に掛りて二言なと申さうしたは
いかにくあるへく
道りおきて 今も見へ御笠への ききのみこもお名あるな

第二
みかりくふ野ことあり武佐あまそりしありて源むまふ
舟をそれに二人にありきて漕つうる何ともあると思ひや

なかきも ひくらしに沖へまゐるそといふ
沖中の舟ハいとしやぬるらんあとさすなるを今の人は
さしあかこと いふ木にまゐるとれりと 拝みいふを はなく
千代よろ まさる歌にも所代まつまみへといふ みや
あさら舟

おとまおかすてしくるらん

業平家集

まてまの所しらはへのほとりも年ふるあまのすさひか

散木集四　俊頼

船もなかひてもいそへ見ても今日おもふ思ひのつきる法なりと

出家中芳

こゝろきえこゝろれてゐる迷て我別るゝは悲しさ人やとひしらしや

後拾遺集　法製　寂蓮寂水紹走

花よ見てよや寂然のゝ水の旅のまよひ　不知也

拾遺集十八雑賀　柿本人丸

あかさら月も到りすくるきはこそこそこそ　万葉　おもそ　花葉　捨それにこそこめ

同十九雑恋

世中八つきともいそや風の音八秋ふかきなふところこそまれ

同撰大雑いせとふ

拾遺集廿　哀傷　題しらず　よみ人しらず

世の中をかくいひいひのはてはてはいかにやいかにならんとすらん

後撰集九　恋一

我ふ恋ね名をみえしあはは見んものならまし命

同十八　雑四

世中はいさともいさや風の音は秋に秋そふ心ちこそすれ

拾遺十九　雑恋

後撰

後拾遺　三　夏　伊勢大輔

ふるさとにまさるかりにぬる君こそ待しやとておなし夜

同　秋上

秋も待二よひも又よひ月も月さ所もところゆる君もきかみ

同　七　賀

かゝみの影のおやとちいさやめりこんのちよのかけ代ひこそやれ

同十　哀傷　橘季通

さいころやさひいつれかなしきは別るゝのこれなまりけり

和泉式部

とあるにて後をあまれと思ふらんこはまなき人こはのちのしらなり

同十一　恋二　赤染

なの花の我ゆきのむかしをこふあ師とも思つとはあつてやはれとやせん

同十二　恋二

いとふとは春ねまけもまたまかなかりまあまあてこころえなり

同十三　恋三

わすれなんとおもふこそそふと夕まとめまはかなるかたられ

同　西宮前左大臣

わすれなはれもほとゝぎすもふらん恋しとたにおもひおとせよ

同十四　恋四　和泉式部

千鳥も若も数もまさりつゝもさとていまハ久しき春

同廿　誹諧芳　源在綱

花さかハ桜を人のおもしや桜のはなハさくらの春

新撰集

花ならはひもまゝさき花さき花を見ハ花ハ花ならん

猿投授世庵

はるの花若やまちはまちつゝ花ひもこひもよるハ春くつ

清正集

かへりまや人の花桜つましもつましもまさりし名つゝもまた鉢

長能集

咲くる山まて桜てふのこゝろやハこの山桜ハよるまて花さやけ

若之集六

うつまた若もはやも出しきハうつても若もはなぬ花なりけり

同八

若のことならし花さ若まよ花今ハ見ることかくもまさる

宗祇法師

以後集

桜

花や八はさきにはるはの若の桜にあまるふこそうこそまれ

こゝまさる名やくるまさて山くちむかしくの衣しきえたる

並弦 新古

ちかひきし我のみや世にはつかやすやすれいにこそは世にはまきあ

僧正遍照　新古今

すゑの露もとのしつくや世の中のおくれさきたつためしなるらん

源順集

おとしもこえもこともおとひもきのみなにすみたるもこたる君

右京大夫集

このよにはまたもあふましなかなかにへたてぬものとおもひしらなむ

作者未知

こゝろこそいまはうきよにわかれても誰ゆゑにこそなれ

源順集

おとしもこえもこともおとひもきのすたかきすることなる君

小野小町　古今

世のなかは夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらすありてなけれは

拾玉集

いとはやも家のはかなさなりても今はつきはつゝもまよふ

西行　述懐

身をも捨ぬこれもなき人とおもふこゝろこそまたあはれなりけれ

日吉百首　雑

旅の世にまたたひねして草枕ゆめのうちにもゆめをみるかな

第二　楚忽第一旅百首　慈円

これそこのつねにまよふ身はまたぬ人をおもふこゝろひよ

一日百首　雪

色々しこゝろもありし雪のうちにしきめるひとはなもはつかしくそ

宇治山百首　山

世の中に山てふ山はおほかれど山とはひえの山をこそいふ

同三　織百字百首　梅花

春ごとにいとひいとまぬなれや梅は匂ひちらぬ日ぞなき

同四　法樂日吉百首

枝の戸をさゝずも松のもえるし山の端の月こそ出の松の

同五　建久元年五月の比隆寛法印宗のもとより十首和歌を送られ

なかにも　かつりぐ人のおもひをたのむかなあらはなれ世を

言い

なれ世のなかはうきをしらねども世をひとつにてもなきにつけても

同

これのみぞおもひもとめおもひ世にかへり世のなかひとも

右大将頼朝

世のむきはなのかれしはをかぬとなりしら世をもぬもしさ

同五　承元　偕製信之

山のはやとをきくもおもふ人をむかしも今も鶯のこゑ

若

同四　詩歌合百首

春の来て花よりさきに梅が香をさくらにわかれむちるらめの春

同六　雜

世の中のうきもなにやはよそにおもひてもかくとはいはねどもさあれ

同

歌をいでゝいつもさしぬるなり中なる世の中に在りながらかへるものゝ

同　獻新百首

嚴雅僧正

世の中ともすぐにいのちうき物はなし

よしなきをかくもまた人のこゝろかな世をつらぬはおもひの宗

人心つらしとおもふ人をかれと人をたのむ人のおもひも

同七

序秋百首

何かは人をいかにつれなき中てむすぶも秋の夜とこそおもひとも

○西行法師初春紅の付居宅のいとなまめかしきを捨
て離岸して遁世しはんべりて捨てけるをよまれしうた　と詞書　聞書集三

世をすつる捨る身はまことにすつるかはすてぬ人をそ捨すつるとなりけれ

○春霞集之

糸ハ君きこハ糸とも赤きさき詠をたよりて彼を思ひしを

○続撰集九　巻一　よみ人しらず

花ふ人花を思ふ人の花ふ人あまりにさる見花ひらく

○三句返し

拾玉集二　厭離百首

雪ふかし道もふかし山深しとひくる人のなきぞうれしき

○雑歌部

○深秘政集上　霞　橘以方彦

ノリ見も春山のまと霞もえ子のわざハ網なからん

○ふりし　日
としをへてふりしてあひぬれば月日もおなじこそ忘れかまされ
○秋夜の秋　嶋名月暮子　新撰
やまと来るための見せよ君が代まちうるまにかな
○たちと立ぬ
かきともし ― なき名はよしのの山のひやまかし　貫之集子
○まきりまかなさる
いせ集
出しぬそ ― 人の身はつきはかなきうるなくさくとろしろ

○みよこそみれ
万葉集
つらき君やそれなりとも世のなかに語る—
○あひおもふ
万葉集
わかひとはあひてぬるよにこころの恋ひしは夜とも月さへぬるに別れける
○うらふれ
万葉集
恋ひつつ— ま[illegible]いふべくつきや逢ひ— なさる— この花
○なかもなくも
○万葉集
おもふ人— ことよりも[illegible]かくれ[illegible]
○後撰集 秋中

○まつ足に踏なくて
○万葉集 七巻
[illegible]—[illegible]
○拾遺集一 春
世の中は[illegible]—[illegible]
○世なくせられたる
万葉集 七巻
月の[illegible]—[illegible]
人まさへは[illegible]
○拾遺集二 [illegible] 百首
[illegible]—[illegible]

すらいそれ

○拾玉集ニ 宮居山首で 五月雨

心それぬきこしとふせん――さゝい――五月雨のたま

まかする哉

○拾玉集ニ 勒句百首 春

君か代ハ――时あらハ 千世こそある 春かせき なき

かへしても於之しても

○拾玉集ニ 勒句百首 二冬

――時それとや 称ハきこらん 時さらむの二冬

○かへすまちかれ 後拾遺集上 咸か杉

きゝて來て――山桜風にちるそれをしき句ひを

ひきこゝろすゝみ

○こゝハ之るハ詞も詞之二てあれハころ同し

○拾遺集十二恋

いつさら――むすしやゝ豆ハ宮ゆきまをこときき

たえこきえぬへし

○拾遺ゟ雑下

ききての――むもてさ以まの云の――よそやかさらん

見まこぬらすくこ

○こゝに見えてハ是と上手同し見ぬ意ニハあらずに

○後撰集 八冬 すこし〳〵しらまて

物思ふと――――すゝめ今年きこえ果てぬ和ぬるなる

みえとみゆると

金槐集上 梅をよめる

春風ハ――――梅のむさとる垣のハ見えて香そあまれる

見まれこゝは まれ

これハ見ても はるかなるあれこそあれ見る彼の錦まれ八詞

さらめて かくし見よまれのたまたしく云

○新古今集

君こそハ――――今のは北あり らくこそ何奈

○古今集

花こそたるの

○ならふまきの これり 山路の花こそまされ見つれ

古今 秋 物語一 花こそまるのと山路を――も まよひよりふ

○見えまたは清ま 中務拾集春

春ぬけ――――秋之まもとれまれこそあれちらしてる

いふにはあらず

拾玉集三　住吉百首　春述懐

言の葉の精はまさに初音なり――――――春ごとの松

なりも古今　春も

金槐集中　恋

[illegible]

君とはまつ――

○金槐集中　恋部　恋

人ごゝろはるかなる[illegible]

れてこそ見えけり

○後拾遺[illegible]つくりすて[illegible]

の[illegible]

○後撰集十五　恋

昔見し――――山井の[illegible]

[illegible]

○古今　春の部

春の色の――――――さく[illegible]

拾玉集六　春部

春風の――――[illegible]

あるもあはれなきもあはれに

○金槐集下

世中ハ鏡にうつる影にあれや———

ぬれすもぬれん

老ハ身のうきま梅之はな———菜の花の香　和歌集

いきハいきたる人

のりひろげかまそきひさくさひえんならハいきる———とと

○後撰集　第二　春中

山守ハ———高砂のおのえの桜をりてかさゝん　素性法師

○続後撰集之　春中

峰風をと歌———桜色ちりかふころの吉野山ニ宿

こふとやいまきみなかのいせん

○後撰集 恋雑　月のおもしろかりけるをみて こよひ

ふけぬるまでまちつる月影に ―――

○古今集 恋一 恋上

年ふれどかはらぬ物かよるへしと せまほしけれ いかにせん 読人しらず

○忠見 三四しも ――― いたづらに

○源順集

君がなや くるまにまちてこそしらく ものあふなるよ

○又 それもまたくも見まし

○藤原有忠集

――― のうつりしものさかり ふきやしぬらん

○忠岑 いとをしく

○源信明集 ――― たのまし はなひらく 拾遺 まちつつ ながめいかの秋のそらかな

○きくのさぬるはなにたちぬる

○源信明集

をみとほりて久しくなりぬる ―――

○若ともしめく
○中務集
うつまやかねぬれまの若○――ひとまてとかふ
若ちかへてか
○金葉集上
さゝなみやしかと見てまたちりみたれ――かすの山風

若ともなしめ
これやこの行もかへるもわかれては――あふさかの関
○金槐集上
あふさかのいはしみつこそしはれけり――なへてとかさゝ

いさやいさり
後撰集 十八 雑四
世中は―― 風のおとをきくも今はことのやさ――き

いさともいさや
後撰集 十八 雑四
世の中は―― 風の音は秋に秋そふこゝちこそすれ 伊勢

秋に秋そふ
〇後撰集 十八 雑四
世の中はいさともいさや風の音は――こゝちこそすれ 伊勢

さむとゆふハつくきや方
かつらといふは梢頭におゐて詠之とまれとハ梁木まて山の林麓の不
とまハ其の幹條のさかしさをもちてかれハさもよりされを餘さく
葉とせんと佐久無ハ無下に居かつきまゝけ左物有まかく
とゝけと葛陽出梢頭となせり本根をと訓(し)林麓ハ是をうく訓
て氣條ともたてもてなのまゝて籍枝この句ゟ荊楚之白氏文集
想東遊五十韻の律詩に懸旌心宛轉束楚意綢繆とハ之――ま
同――

菜種や三輪

まれにやの花　建保三年名所百首　俊成卿女

菜種や三輪の檜原の木間より　まれに見ゆる花そ吹嵐哉

墨染の鞍馬

〇後撰集十二　恋四　浄蔵くらまの山へなん入といへれは

墨染の鞍馬の山に入人は　たどるたどるも帰きななん

〇あかねさし　朝日

二方様詞　万葉集ニ見えたり　新撰万葉集ニ初て見えたり

〇源順家集

世の中を何にたとへん　あかねさす朝日まつまの萩のうへの露

〇万葉集第一　天皇遊猟蒲生野時額田王作歌

茜草指（アカネサス）武良前野逝（ムラサキノユキ）標野行（シメノユキ）野守者不見哉（ノモリハミズヤ）君之袖布流（キミガソデフル）

〇同上仙覚抄第一巻を注するに　あかねさすと云ハ　天皇の行幸なるを　茜草指といふ云〻
かなふことりとぞけるに　たとへハあかねハこゝろきなるを
さてあかねさすといふ詞ハ帝を日にたとへ　あかねハあかきなれハ
あかねさすとよまれける　かくいへる但えハ古語のまゝ詞の
古茜を用ゐる　紫ハ根を用ゐるまゝ　茜の根赤き物なれハ　あかね
さすといひつけたるなり　紅葉　陳源兼といふ　用ゐし古語の

梅之されハ字例のかすもあらハ深東と云るハ氏
第之皇太子の若宮ハ扶桑とも此子之るる妹とともにつけるんこも
めりきを丹とハふるにハ猶さき此子のなるとハ今詠ゆる之

枯ま
さ新り

三垂　漢書巻六十杜欽傳七 関東諸侯無強大之国三
垂蛮夷無逆理之節　注師古曰三垂謂東
南西也

志らとりの多飛
やまひりよんくも白雲のとを山松のねかのこそろく　宝永口

風呂の武庫　言水撰集七
　秋柏ぬるや川へ　言水撰集七

日日利完　言水撰集六
　さ店や本店完　言水撰集八

能呂の泊瀬　言水撰集六
　押照や難波　言水撰集八

拷中の磐梅山　嵯　言水撰集二
　神風此伊勢　言水撰集七

たまきはる

○万葉集第一 天皇遊猟内野之時中皇命使間人連老献歌 返

たまきはるうちの大野に馬なめて朝ふますらむ 注たまきはるとハ

霊の約にハたましひきはまる義命の極と云事なりといふ

命きはまる命なりといふ事と云よし云事ハ稚言十 但め[illegible]八言葉ハ

[illegible]なれはなと[illegible]をもしとありを[illegible]ハ云惣言訓と

いふ是ハ字の字の名目なしかやうの事あり之和語なし

又其之今の事のたまきはるといふハ内裡ハ内裏之事なる

とハ哉きはまるといふ意之言内といふなる事なり

詞之仁徳天皇の武内宿禰に給ふ御歌にたまきはるうちの

と詠せるも此意之由し見きぬまる事なりといへ天皇

遊猟の時よる葉意の詞を会稀に申又ハ内裡と云ハ六条

の宮和歌の理ある内裡とあるハ世之[illegible]かくのめし[illegible]

又詞あしたまハなれハなとかく[illegible]くすきのあこと

あらたまのとしのはじめ

○金槐集下 梅花をよめる

あらたまのとしのはじめに咲る梅の花万代かざしなりけり

あらたまのとし

○後撰集 九 恋一

君をのみ思ひつゝふるあらたまのとしの八恋しとハすらや

ことは海の八十氏川

武士の氏姓の多きをいへれハ八十氏とハいふ也

○金葉集上

こよひ己の やそうち川を わたるかな ながれてはやき 年比たれかれ

○新勅撰

とふの菊の花

○夫木抄八　千五百番歌合

物のふのはちすの露のしけきむりのこと葉

後京極摂政

称やまうへん

玉垣の三度

玉垣とは瑞籬とも云ハ神垣を云之加様に云ぞめ

そのほか垣もとの類の瑞垣也とも云 数多し之

○壬二集

玉垣の三度の湊にまされハ行くかふ人ハなをさすらむ

志るて曰

史本部王　稲荷五首

志るてるや如き山雉子志らす忘て来りし日かし咲きぬるを　おまへ

新月發句の先山

末本部八郎公

咲てぬるゝ中の先山の時鳥まや　ゑらもけ是ひこそれし　後判

夜長さ木戌の里

未本部八　時鳥　百首法意

夜長まち志らのまの花ときり如きすそけしこそ礼あるを　明德院法製

足引の病

○後撰集十　恋二　こゝろにたえける女のもとに文つかはしける

名にしおはゞ　あふ坂山の　せきやれはまさりつゝ　よみ人しらず

右近　紀貫之

足引のやまひは上の句の言の字をあと句の言と八字いふ

○病とは山といふまくらにて　山と病を合はすハ

あしひきの山といふは　作名といふ

角澤不見　家持拾遺集七

玉篇石　家持拾遺集二

○言類詞

枕辞に似て言付たる詞なれと之ハ和歌の浦をハ

芦原の浦といひ三津の浦をも[illegible]といふなれ

ひの詞ハ意句のやうに言へいひならはす云

うらうらの浜　　　兼康

○新古今集

うらうらの浜に生ておふ芦しらぬことひまなく[illegible]

かしらのこと　若庵

○秀句

ぬきぬ句
○続古今集八　さい将中将のみやすところ　いろそへてこれこれ松のあをやき
おりゐるくもけなとのむくいてまうり
かけまとて　あかくるれいかゝる　ぬれぬ面あき秋のこそ来まぬ
こゝろこしの古種
○いせ集　やまとにいきてまつりしあ人とものいひてあ
ことの山いろは待る人年まても露ぬる　今もあらしともへは
みあるひとよかれとれなのかへれいそてくし　なきぬる友人露ぬる
人かとあるハ人こゝろくも
ゆふのまつ秋の山をこゆるとも　あかれ人ともゆふ高き山まて

世をうらみ
○ノ世集
世を海のあまとなる名すまれいつむれとそかさる万葉

ひとまかのこ
○同世集
心なれともひきなる北不立ぬ小家とうしや山ずみの人

声きくこみ
○新古今集八　時鳥
ほとゝきすふかき峰より出にけり外山のすそに声の落くる
西行上人

まつとてもすくちるとても形く
○拾玉集　六春
等しき春のゆふへのまつかせは
○同
花の色をみるとも明かくもなく
花の散るすかたを別れとは見るらん

おのか子日ある
○[illegible]集
あらひとあやめのこ[illegible]ゆくもさらにしまきぬといふなる

花のひもとく
小野小町集
ことし草[illegible]の種とは[illegible]たえぬ人[illegible]

○[illegible]八[illegible]ふ
○小野小町集
[illegible]世の[illegible]の日[illegible]見えん
新古今

かをだにぬすめ
○僧正遍照集　古今集
花のいろは霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

春の人
○素性法師八[illegible]
[illegible]にはして[illegible]ふ[illegible]のあと
[illegible]集
[illegible]

君はちよませ
○源順集　○拾遺
老ぬればおなじことこそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ

紫の瀧
○夫木抄 六　家集
紫の雲に吹ける藤の色をなほかかる布引乃瀧
凡有之二
○拾玉集 六 夏
松にかかる木末の下かけの岩の出しは八瀬かかるかなふ藤之
かかる藤川
夫木抄
泉川かけ見えぬ名所のこえかかるか之藤川浪のまにまに
宗家卿
月影に
○拾玉集 六 夏
玉川の里とふしやにほふ下の月影洗ふ八宗の卯の花
月のかけ
○夫木抄 七　秋歌二首 四季 玉
玉川の月の影にかけてみゆ花のみのまきのこえ

恋の名所
○拾玉集 七 恋
うちとけしあふせは花にかくれさてやとにて右かなふ
宗こそ
氷をあらふ
○拾玉集 七月
秋風に吹よせてなる月影に氷をあらふ宇治の川なみ
桜かくる
○金槐集 上 春月
風さそふをちの山辺雲晴て桜にくもる春の月

本歌の作

○金槐集 上 松風似時雨

我宿の かきねにちかき 時雨そと 夜はの葉の梢の峯の松風

寄雲恋

○金槐集 中 松山寄恋

草ふかき 山も霧たち 君にこそ 雲ゐと分る 心もなき身の

峯の松風

○拾玉集 六 雑

ふるさとの 峯の松風 里の月 音あらそひて 見ゆる山のおく哉

同七 立夜寒恋

住みなれし 人のわかれに これを見て むかしの秋を しのひとそ思ふ

萩の言葉

○金槐集上 萩随風

吹く風の 萩原 芦の 枝しなへ 本あらの萩の 花のかすかも

風前月

○拾玉集四

庭の松 きよき 竹をうつす 百首月前 冬

風の月もむ 秋の夜の 松虫

風前紅葉

○拾玉集 子

散りまかふ 紅葉の枝を 見しかとも 風前紅葉 思ひこそすれ

花ざくらちらねど

○六百番歌合　春曙　　家隆卿　　寂蓮云

霞ハ花ざくらちらぬさきにかゝる峰の雲のごとし

判者春曙桜図ざくら雲と見ゆ後の句をあはれにてもよし

ちらぬ花よ

○寂蓮云　春曙　建保六年名所百首　従三位範宗

春風の花ちらぬ時ニかゝる山ざくら雲の花ニかゝるなり

○離辞　源為信

別の涙ニ袖をぬらすと

○万葉十九　離別　男の伊勢の国へまかりける時

君か行かふ道ニ春ぞふかき川せの袖ハぬれてそゆく

みちのたびと不ちらぬなき名をもてわか身ハちぬるに

ならむといふはたちよりとなりにけり

とはなきといふになりゆく何ゝらき名をきかくせとも

こかう　鳥漕

和名の ことに鳥の漕をとりていふ

○後撰集十九離別 鳥こそとまれ よりなきにつけて なる

おもれまたいまのそこかう 宿まよふに鳥こそ [illegible]

和歌
巻拾六　○和歌部　惣括

詠歌　詠論議　和歌道

歌道　八雲抄　古今伝授

古今集序注　細川幽斎　古今灌頂

冷泉家初撰者説　勅撰和歌集時代

撰集歌仙　古今門弟撰集入

宗匠家　古今切紙伝　男伝授　東家伝受

家々伝来古来家　五條家　二条家

冷泉家　歌之師伝　歌合三席
歌道二席　二条冷泉　和歌六祖　判者十体　歌之父母
詠歌略頌　大和言葉　大和詞之歌
歌合之始　歌讀敬作　玉之歌緒
和歌八病　同後腰病　清濁音
歌詞糟糠　歌眉　和歌文字三音
歌学　歌讀文字　二条冷泉二極　先作
歌袋　枕詞勅物　歌枕

長点　合点　撰集後人不知歌
旋句作歌古今異様之事　疎句　親句
歌之作歴花実　和歌与琴合之譚
和歌動天地感鬼神　詠歌枯槁再栄
詠歌章踏杜再生葉　六歌仙評論　歌仙一双
当世詠歌　歌之書東
百人一首歌　難題　撰題
結題　御賀歌作法　枕並叫歌

新撰字鏡　天了記載　　十二月和歌　九條目次京極家の口授

入内屏風和歌　　教訓和哥　　百首詠ミ始

八雲詩歌作法

懐紙　　短冊　古今　　試筆之歌

辞世　　詩歌称要用　　文書称要用

容儀　　歌仙　詩仙　　詠歌　詩歌

詞別歌　　好言作傳

歌論議　うたろき

大綾抄 癸細云歳ヨリ川ヨヒとのいふ事一と和歌のこゝやかし
おく道あつりし人の歌論議といふ書出来て是の人のいふ
もまさきまとる歌の学問ヨリおのすゝきにこれ大納言殿ハ
ことさらにをさむれハいかるかきをとて歌ありし後の説はゝ殿
やこの花冬ニミうつろひて甘き是世もいはれハとあり御しのゝ花
いみしうおもひあへまさきるをかれ古之書キ歳へさせめ
まんたく人て見いていとさめ作りまに候

詠歌

匡謬正俗七右貴嬪晉之后誄云、内敷陰教外毘陽化
綢繆庶政、密勿夙夜、恩從風翔澤隨雨播、中外禔福遐
邇詠歌、皆云、古賀之斯古之遺言也

和歌の道の事

今ハ歌とて一よりよく堅数まじへていひてたゞふときすとハ
なれり今儒学者今ハ歌とハ唐人の詩を和歌に対して
本朝にいふ人の言これ一つの思ひ出に似たりとせり されどもハ
其の事ハの詩といふものもまた和歌に作りてそといへハいくハ古
万葉集の世の中比此の歌をもいはゆる歌ハ多くともなとにいたとへハ
歌のことしこれよりて書きさらひて刻り志されハあなかちにさまよ
ひ行かめしかりて歌はたゞ言に多く言まもいふへしされハ中古より
近き人多月年て謡家の職業となる歌とハいふへきされハその家子
てハいふまことくしくえくしまつ誤りあるにおきさとく
そ違きなきうちもまさあるかあるに近し色きにて和歌ある
古書借子といふ今の云家綴名家勢位式儀不暇稽古僅秘
花儒詠之一途以動天地感鬼神讃其砂拈然天地不易動
鬼神不忘感なるといひ古田の立属か囲書八詩と歌ハ六義にもあらすハ
また和の以歌は是非あるとそのまつく見しくいくあるもいひてあらん

敷島道
敷島とハ大和なるかち　和歌の名とす
敷島の道　夫木抄五秋

○和漢代記十二　後醍醐帝の御時二条中将為定ハ二条為世を唐名と
六位蔵人石摺て　携る家の事を為人とせし和歌
若ひをや承知後の歌を廃して世の事をとたえしとて
放題随所に範貝二品の家を見て歎息の事を定頭を流
世の事許されさて言葉を人ゝなかし

○千載集序　藤原俊成　しきしまのみちさかりにおこりて代の古きゝよりも深
く仰の林もしけくしとも見ゆ

詞

八雲道 やくものみち

○猶古今集序 応永甚宗 此仁和の帝此事の二 おきかね

並花抄の若菜たちて年をつくして雪の中を猶見

出国を那子雲の外よりきこえても ――― 山口

さと出くれてひろく千里の山をおもひ

八雲の庭 前左大臣 正秋

古今伝授

○玉露叢巻之十 古今集勝伝授の事 宗家の相伝にて二条家

より始まり伝来して 頓阿の時 常光院の頓阿 東野州 城主 千葉東

下野守常縁は宗祇法師にその伝授を許す 唐人

にわかに 微にいたりて 下野守は小身なれとも大名なれは金銀の

伝授をうけて古今集の奥義をしく伝受を依てはかり伝へまいり

上にも及ひ 名残の中にて 其の伝来は 将軍 西三条実隆 殿家

宗祇よりうけて 宗祇法師 其の後 諸家 修行せり これを中人と

いひて 東野州は 方々へ古今集の伝来を不生 持ちたる其の深切なれは

つたへ 伝家より伝へられたり 宗祇は其の伝へはたらり それを古伝

と実隆 公へ 通達のことく 宗祇より 此人 其伝受をも 此殿家

宗祇は伝授を請て 古今の人皆ことに其伝よ 此状を知りさ字

扨又一条亜槐何ほと逍遥院と号す其男公条公条ハ称名院
と号す此の世にて細川兵部大輔藤孝の在世ハ古今集の伝
受有藤孝ハ細川陸奥守元常之養子家継とハ云とも実ハ足利将
軍義晴の男也母ハ三条西実隆の女也藤孝ハ三条西実隆の
孫なれハ称名院の養子伝授ある事古今文禄之年相解証状の所為
古今伝授之書参考来られ時ハ相解之後慶長迄も計りかたき
如右京への大伝授古今更に其の一書写し烏丸大納言光
慶に八条殿の御事とハ雑なる所ハ此事に於て其上宣院
まて相伝ありハ三条西家ハ其後して禁裏へ奉上せしめ其の筆
その封して一筆と候へり
其之も今も相伝ハ三条西家の末流まての[illegible]のこと此ことのなし
其の後幽斎より烏丸殿へ相伝ありて烏丸光広卿より又和歌
在くられこり

此れ又筆なとハ三条西家まて代々[illegible]和歌所ありて候
かくして慶長五年の比天下動乱の時細川幽斎丹後田辺にて籠城
以て　東照宮御味方として忠興ハ関東へ供奉して
其の幽斎ハ丹後田辺の城に籠る石田方より討手向ひ
攻寄るに後陽成院より此事をきこしめし幽斎討死せハ
古今の伝授絶えんを歎かせ給ひ烏丸大納言光広卿
三条西実条卿を以て和睦の旨を仰せ下され中院通村卿
に仰せられ古今伝授の事仰せられけれハ実条卿古今伝授を請へし
とて八代集抄物等まて三人にて古今伝授を請給ひけれとも伝
受の子細ハ以て古今集にまして古今集の伝受禁裏へ
上りて其ハ三条西家の古今伝授の禁書へ
奉りての之まて古今伝授にして幽斎ハ伝授終りて
和睦して城を渡し[illegible]にて[illegible]に至る

の俊法橋和上任て子息右兵衛まで法か思ふ為父まで有
要附和歌して掟を伝されしよりかひなきと申されし
又ハ幽斎法印さへ秘もさいたひしはれども勅命なれハ芳禄に
と申されしそかりして当の事ありしなかれとかや

〇東見記下　細川幽斎之聞古今集時郭公鳴古今伝授秘伝之
一事也　春秋以後

〇耳底記上細川幽斎筆　古今しやといふはむかしと秘さしにあり
同中院通村まで八古今伝受有しといへとも宗家ハ
十六歳にての伝受也
基俊か家にもり出されたる家より新たに出されてなきさの
させへ伝出あれとの異義なり加ふる事てきまて其実義にまる
せられられハ基といふ事を其にて山法師の女子あこくと
とあらんつねつねの名を伝受さをされを伝へらされり

〇今按ずるに　宗祇は十六歳にて古今伝授有しといふは
八代の孫に見へしとやいぶかし　明月記にもさもかく
その時法師して　俊成卿古今集の家説まさ古今
伝受の事見えぬやうの事ハいつ伝へられしなどいふべしる人
まに伝受といふ事ハ何にも見えて基俊の異説をのこしの伝受
られしといふもおなかなきことなりまや古今の家説
なき伝授を諸人の伝へしなれ真実之ぬけがら伝受
といふ事なれ見にきはまりきや　基俊か末孫の
時より始まり

貞徳以書元父子具して文禄二年十月十二日於玄旨法印
八条殿御法宗古今集の事て一の箱を開き法傳授
忘之すとて是世傳ニ傳ふ抄とか註の抄ニ集大かた花蔦織
皆三度置を奥書集法秘抄是ハ三光院殿の法奥書
ニ有る法以前法書の事之
今藤孝貞治人ニ有り事の前抄其の云ハ之所
も是之し法以古今傳受ハ玄旨まさの中ニ有る世
ニ有るせ抄わりて其の古抄是ハ思されまきと之

古今集
閑寂呼声　三鳥傳
喚子鳥之事　傳ニハ　精ともいひかつこ鳥とも云ハたとへ
何ニても世上静なる所になく声をよふこ鳥と云之
青為群　百千鳥
百千鳥之事　傳ニハ　鶯ともいひ千鳥とも云ハたとへ何
ニても春来て鳴く鳥を百千鳥といふ之
道之魔　稲負鳥
いなおほせ鳥之事　傳ニハ　せきれいとも云傳ともいふ
何ニても鳥の来り人之世に人に益たる事をいなおほせ
鳥といふ也
右古今集三鳥傳ハ　口伝而後古今傳授蒙藏
中山中納言孝親卿所被秘也　此傳予借之書之

同集中三木之事

呂玉木　紀友則

三吉野のよし野の瀧に浮ひ出る泡をか玉の消ゆと見つらむ

神鏡をさして呂玉木と名付く　鏡作部遠祖糠戸

神女作りて奉る　今内侍所之　天照太神　孝霊号

紀路恐天石隠久山磐戸籠給于時　天照太神

此新鋳作鏡之　此鏡玉如是之

古今集を読次第條々

耳底記中云〻　古今集一巻二巻次第ニハ讀如之也

六巻之一巻九巻とよむ之さなれハ　今日ハ也よむ了也

○冷泉家秘扇子之説之事

○桐源院殿之　享保六年丑十月廿六日従晩冷泉家（為綱卿）

二枚三神手ノ　廿八日文庫家傳三神神為手可秘

扇子（霊元院）院法所ニ拝領之　為中納言（為綱卿）右今冷泉家旧集

入家傳書為嚴讀年ゟ秘扇子拝領　追出于日　二為三

経秘上之　傳家傳之類題後家道勅免為傳之

○秘標旨
冷泉家の先代に家の傳来の書悉くちりうせ
しけるを雅章中川清基か祖父とやらん云ゝることをなげき
霊元院様の叡慮にて選せしめやがて家の文字に勅封仰付
られしを不得 時に二度家をおこされし冷泉家の古文書も
よくくり集まりて写されたるを又勅封して今に有て其の如し
為久為村おゐ為泰卿の時家の一出後の冷泉勅
條を見て一説ある写されし又新たに書しとしていへる秘
草案皆説くいろいろかの家のハ難所見して必ず証
請達てよることに説たること二享保中比 右法院様の御
此頃まて中家の中とも上られしまま吉田篇信胤の次第に之

撰集の和歌集の事
万葉集ハ天平宝字三年より古今集出来し延喜五年
まてハおよそ百四十年をへたらされとも歌の古風大にかはれり
さてそれ延喜五年より仁平元年まて八二百四十六年を経
又は撰集拾遺集後拾遺集金葉集詞花集の五集ハ出
来たりしにそれより卅八年を経て保元元年より世の中乱
れてなにも沙汰もなかりしうちに文治七年に千載集撰まれし
このかた二百四十一年か万葉か古今の八代集といひしそのほか
後花園院の永享十年に新続古今集まて十五代の集ハ
これ乱世の中に出来しよりこれより八家のうちもたえてきこえ
天和元年より今も江戸の法度くありて廿年八百年
法まてハかこゝにも撰ませる冨居の弟子の八代集とあり

尤こそあるまじけれ

撰集并ニ実作

○耳底記中問烏丸光広 新古今并ニたるとハ一首〳〵にまで
てよまれ又十首のが七首八首不足も康なり家なりと云
事ぞや
答細川幽斎 初頭 答古人并ニ実ある古道の集也
新古今 并ニこそなれは撰ニ実あることあり中の中を三
て撰は撰をはなれたり花実古道の集也 古人一字をも新
勅撰にはし

三代集ちとかはりてある千載をはなれたり新古今并
ことなりとて新勅撰を定家の心にてはなれたり千載新
勅撰の中をとりて撰は撰をたてられ撰せられたり

○今案ずるに千載集新勅撰集撰は撰集ごとの二つと
家の三代集と云後撰拾遺ちなみの三代の撰なれハ之

古歌を引並撰集ニ入

○耳底記中三代の撰集いつれも古歌を率して集之の心れり
集之の詞に歌を率して今ニ云之まゝ古今の歌に
吹くに秋の草木のしをるれハむへ山風を嵐といふらん
是ハ作者ハ其之の草木とよまりこの歌しかハ吉ハ嵐
秋にかなし此れとも中比まさるさまき故秋の歌に入りて是秋
とかさを入りて嵐を秋の歌とみ出たるハいまれぬまで

宗匠家

○風雅遣稿第一　宗匠家と云ふと　仮令古今伝授なされ
ても宗匠家とハ号せず只和歌所と号し仙洞にもせよ
當今にもせよ　法師範と為　歌道の長をなす者を宗匠
家と號すする事今ハ為心ならひてすへて宗匠家
と号し我等が如き町人百姓和歌の弟子をとりて宗匠
と号す事ハ歌の家職なり和歌をとりくむすさ匠と
いふ所一人の事也一人ハ古へのりし古今伝授の
時も一人ハ孫当とふる宗匠と為り其ふ時ままれぬ為也
此道を為しハ町人百姓にて和歌の宗匠といふハ俳諧の点
者の類にて有べし此宗匠といふとも夫ハ其志有
と申す人の作せられし

古今集相承伝　堺伝受、　奈良伝受

猶其名称　宗匠の伝来　紀貫之　基俊　俊成と

○古今集の古伝受之二条家ハ為世より頓阿が伝へし

経賢　堯尋　堯恵　堯孝　東野州常縁　宗祇　逍

遙院実隆　称名院公條　三光院実枝　細川幽斎法印と

伝来りて　八条殿　中院　烏丸殿など皆幽斎より伝へ給ふ

宗祇より牡丹花肖柏へ伝へられし流を堺伝受といふ　これ

を又肖柏　饅頭屋やつこへ伝へしを奈良伝受といふ也

歌道三流

東常縁か申口　基俊　貫之女院　顕季　六条家　顕輔　顕季子也　九条家

宗匠三流大略如此之

基俊ハ大臣右大臣俊家公の男也右兵衛佐入

歌家二流

古ヘハ基俊　貫之如説　顕季　六条家　顕輔　九条家　是也　二流今ハ

後ニ二条家　冷泉家　京極　二流の二統伝へられたり　是ハ俊成卿の孫

定家卿の男為家卿の子也　三代の撰者其いこしく世々相ひらけさ

出来り此為家卿の逆修の後二条家の末為流されて二条家冷泉家

とあるハ二条家ハ為世卿より嫡流経賢尭孝尭尋尭孝
東下野守常縁宗祇逍遥院実隆称名院公條三光院実
枝細川幽斎玄旨法印ニ伝ふ　尤今世ハ条殿中院内府西村
烏丸殿まて相伝ありとその法ハ伝ふ　和歌所と申ス
冷泉家ハ為相卿の家をいふ　以下之臣

和歌六祖

[illegible]殿の家ニ伝ふ──和歌六祖の聞へいふことの書ニ見えし
名ハ未詳なり　之書ニ見えハ二条家の三祖ハ人麿貫之
定家之冷泉家の三祖ハ俊成定家為家を並ふ二の家
家の祖を合せて六祖といふ事〳〵

判者十体

○十訓抄巻二ニ云　高の判ハ未だ見ず
世ニも定せられし人の書きしときこえ　俊頼顕昭十体
ありし人ハ判者にあるまじとぞ　かれこれ源中納言国信
の家の歌合を俊頼の判なるをバ若狭の阿闍梨隆源
なと依善俊すどもおぼつかなき書くのすこしも出
たりや　云ハ世の為のすこし人よりみられ
故ニ十体とハ世の為所謂体　和歌才学ニ利古家
是以下条〳〵之

哥道傳来系承

○授受名称　　哥道ノ傳来ハ　紀貫之　基俊　俊成　上古

今集ノ古傳ヲ云之　二条家ハ為世ヨリ頓阿ニ傳ヘテ　経

賢　堯尋　堯孝　東野州常縁　宗祇　逍遥

院実隆　称名院公條　三光院実枝　細川玄旨法印ト

傳来ス　八条殿　中院殿　烏丸殿等ト云也　玄旨ヨリ傳ヘ来ル

宗祇ヨリ牡丹花肖柏ヘ傳ヘられ　是を堺傳へと云ひ　これ

を南都饅頭屋傳へ　是を奈良傳へと云之

六条家

和歌の家の事 六条家とハ六条修理大夫顕季卿より
初りて其男左京大夫顕輔卿其男清輔朝臣是也
其顕昭法橋是也 俊成卿初ハ其顕輔卿の養子となれ
顕広と云ひしか後ニ本家ニ帰り俊成の家を興せ是ハ
其子と云ひしかれ故定家も改められ 御子左とも云 二条家の家ハ二代
定家より起これり其定家ハ其父経信の女の体を為
中ニ鉄体ハ定家と云之

二条家 冷泉家

二条家とハ為家卿の後二流とわかれ為氏卿の子孫を
二条家と号ける為相卿の家を冷泉と号之 俊成卿の文
乃俊成卿ハ冷泉中納言といひき

○按に 為相一所新 中老 何中 二条家冷泉家とハもと定家卿の住所二
条西と冷泉との東嵩なる故之 是を二つにして其の二条
北方ハ為家ハ為氏に故二条家といひ其北冷泉の方ハ為相
卿ハ冷泉家と云之 冷泉家ハ上冷泉下冷泉ハ
在云之

歌道師伝

○義忠記 第一巻 和歌に其師道とすれハ師伝といふ事こそほし
きと思ふ人あらんされと其事こそ 万葉集を見られ
はさまてひきとも猶ある事なし人丸赤人山辺の家持よ
り伝へたることなくして猶同し今の世にも猶伝へ誰
伝へ作る文字か是伝ふ事もあるまし人ハ各其身に応したる歌の道
を詠みしかめて自然の事なるへし 然れハ其者の
歌の師の有無ハ古への歌道の流れをつけしれハ和歌の師弟の事
とも今の人丸の法を本にすへしと幽斎法印ハいはれし
ののしり

歌の父母

古今集序 なにはつの歌ハみかとのおほむはしめ也 あさか山のことはゝ
うねめのたはふれよりよみて 此二歌のちゝはゝのやうにてそ
てならふ人のはしめにもしける
○古老伝に難波津は浪やあまねくの歌ハ仁徳天皇此
御代 おほさゝきのみかとを王仁かよみし歌所文にはて
第十六 浅香山の歌ハ采女か葛城王へよみし一歌
これハ母にあそいふ事也 二歌ともに人をよろこはせあそ
めでしき歌なれハ父母のやうに世におしろく歌
なをいふ 初学の文字を手本にあたる
かつ歌をもよむ人ハ此まゝよむへし 源氏物語にも
そのまゝ見へたり

詠歌時頃

〇晴の後序諸言房業この時頃にて何人言葉歌ハ心を種として
心をたねとせよ何するかにまして何するかにまかせて詞をもとめよ
ともいへるを見るはは風情ともいへる風情をもとめよ要といふ事
らひてするを習ハせ古風を学びして古風をまなぶべし
て為人侍りと申

歌の父母

雅ははなはだ三代集ハ歌の父母とするよし古今集の序に
之ハ又源氏物語を読合はせて物語の母とする事不行ことあり
父母ハ歌の根元といふべし華厳経に信謂道源功徳母と説
まひ又智度論にも信謂道源功徳為母と見へたるがごとし

大和言葉　やまとことの葉

皇朝のことのはハすべて大和ことばなれどもちかまぜて今
歌を学ぶ和歌といふハ三代集撰集に初めて見えたる葉集のまを
いへり万葉集までハ和歌ハ近き代のことまで詠む和歌の始なり
歌の詞はハ漢語をまじへてよまざりしを和歌ということ云ひ
ところ〴〵和ハ古歌にもあるや末世に抄り歌ハ古代にはあることに
ことばハ漢語をもまじへて用ひられど今の世は上古ハこともあれ
人あれどもそれら古き所ハ上古のこともそは今ハ上古ハともあれ
今の世までハかくもいふをその詞とて源氏物語までを見て
これハそれより後の世までを見るいふと見へたれども古今
のことばも思ひてひとつに和歌といふともたゞ見るハまる
ゆきまじきや

○源氏物語　桐壺　これはけれは説ける　長恨歌の注序
そ使の名也みて　伊勢貫之よまけせける――もろこ
しのうたをまたなたちをそえうたにせさせける

大和みことの歌
○古今和歌集序　大和詞書　やまとみことの歌ハちはやぶる神代より
あまりて古今の集の名あまねく家ひろまれり　ここにまた仮名
の字あまり七文字の中を出しておはしとを詞をまなびて云
つらぬる歌ひとの歌に三十まりはあまり一文字をこたへ考つる
つきのハ出雲やくものそこをしのき　大和ことのさが
ひさへをきたるとよい哉へし

○新後拾遺集序　藤原良基　しきしまや　やまとみことの歌ハそのこ
とわり天地ひらけ始まりて　あとりその道　久方の神代よりぞ
八雲り

歌合（うたあはせ）

歌合ハ上古の世ハなし今の都となりても其初つかたハさまて久しき宇多院の御時ニて初めてある事也寛平の菊合おなし時にも花合の事始並に始とも新撰万葉集ハ菅家万葉集と云菅家万葉乃作之なるも多く此時歌合也ともみえたり

法皇御歌合序 伊勢乃日 歌合といふ事の始まり人々を見し伊勢か人は歌合を亭子の院の御時よりこそ見えしあれ也

歌よみ家作之事

○東常縁ハ出一蕪結和尚へ宗祇伝 在東事也 牧子法諱元父に家人とは入る宗長以来家法今其に両行孫五子相一三作並経家作其にと上ると告に相当相換其の常光院其其子此子継之 稲云

哥の病讃

哥ぬくの病躰と 哥の名之 哥の屋哥 哥の詩の心之

大和物語上 鈔本の病に美様病といひける人をまつちか

まなめし哥うれハ まさて ちまりはる

料ありね あまりおくれの良ハひつ くさ（抄）れすゝる

とまえて ちまりれハ つてみつく かあみえし 哥の為縁やく

哥の哥ひける

八病

○白氏文集 明本廿八 賦賦 詩四声祛――信斯文之美者

○詩哥の指摘をよむ病といふ事 古四病八病等の事古

へより入る歌式にあるさまさを去りその一病と二をまつ八雲の

沈約より初まるを唐の封氏か聞見録巻一声韻の条子云

周顒好為體語因此切字皆有紐紐有平上去入之異永

明中沈約文詞精拔盛解音律遂撰四声譜文章八病有平

頭上尾蜂腰鶴膝以為自霊均以来此秘未覩ここと之――

是四病の始りといふ――

後悔病 百卅 俊頼口傳集

御製歌

天子の御著述ハ詩歌ともに文章とも御製と云 和歌ハ御製歌といふ之 万葉集第一の初ニ雄略天皇の御製歌あり 仙覚抄にもこはおほきみのうたと訓り

歌ノ詞 糟糠

二条中将 語云 家ニ白ほまり はなしもを

とおもひしすかのあり や 千歳須と いふもの 歌よ

月いしみえきれ 中の もろ萬十を

なかめしも おいくめ なと ん

と思ひきらし ありきとりく おのが 中の 世と

いかにならぬ ものが いたしはつれ なききぞく ろきよ

かかなる ちまきも いきは わりまし

大和政仁家よ

すゑの世まての かはりなきものを

いへるあまたあまたなき

これも新古今集にいへる の ことばなり 古今にも

これなどもあり 歌にはよしなし

也 此ことばは歌のみのことにや いかに

歌人 [illegible] いへる 今はまた [illegible]

歌屑 うたくづ

〇信徳集 上 和歌にも あらず誹諧のものにもあらず [illegible]

[illegible] といひ出れば [illegible] [illegible] 歌とも [illegible]

しくぬるさ此のことは [illegible] いひ [illegible] といひ [illegible]

[illegible] のやうなり いへる とや [illegible] の歌に [illegible]

[illegible] 之の [illegible] といへるは [illegible]

歌所とも名いひ 伝へたれど其の 古人の まことぬ [illegible]

[illegible] 世の [illegible] 歌は [illegible] のことも [illegible]

[illegible] 歌とは [illegible] まことなれ

〇 [illegible] 之集

[illegible] 剣路の [illegible]

〇 河秋 [illegible] 集のことなり 古今また [illegible]

集中此歌所とは いへる 人の [illegible] なれ

和歌文字有三意

万葉集五 山上憶良の歌の序に 如此歌と並てありて 二首あり八言
和歌とて唐詩にむかへてあまた 三代実録に 嘉祥 のまきにみゆる和
も 作和歌とみえ くしもこのたつの下に歌を 和言とみえ 万葉
集に 和歌とみえしは 和韻の意にして 古歌といふにおなし

歌学　うたのかくもん　歌学

今の世に歌学者といふは 儒者なとのことに 勿論なるものとも書
あきらかなるは 歌の学 しかや 大鏡に 歌の学者といふ天文の学
問 なれは なれは 俗 ことゝいふへき

○大鏡 巻五 太政大臣 伝 大納言 なりまとのいかなる和歌
如何 といふ 唐土 歌 道 といふ 先生 その
人 いろ 歌と歌のかくもんこそ 和の道 なる 八 後生
房八 なりとも のみ八 なりけれ八

○祢字二条浄弁之様

二条中納言浄弁法師と　云の流をしたひ　家の集に載有り

二条中納言は世々の歌道家を司る浄弁もかかる家にては猶さ司るべき

事之様なり故に法師も事之和の中にもされは其さこそめでた

なきものなりける野夫の事之

言残

今世の作者の中にも権紙を作り綴るに雑草雑用故事と

今ここに云へ其趣を書之ハいかにかなふ是非之未得

○夫和歌五性にして仁之本指忍省　藤原為親

以て之を考ふに時節なる性の家道あるにある事なれど是にても連歌也

植物動物

言の習字に此名目なし此称文選にあり是にて其の初めは周礼

にあり

○文選東二西京賦　張平子　繚垣緜聯四百餘里植物斯生動物斯

止○薛綜曰植物草木動物禽獣也

○周礼

動物宜毛物也植物宜阜物也

歌枕　うたまくら

歌を詠（よむ）時のまくらことにおもひはかることゝいへるとて
枕と云事久しきより又名所を歌の為の枕なれば歌枕といふ
○袋草紙上巻　歌のことを博くしるしにいひしはかなきことゞもなれど
いにしへ今もさまざまの事多し　国々所々の名所の名のあらはれ
まあるべきものにあらねどもまたあれば尤も書かれ
もろく見ゆ
の大鏡第五　又扇の人に扇をもてまゐらするも其人にハ昔を語
ものなど或ハ白金にて張れる骨は黄金の綴をのせたるを
ぬ紙とまで何の見せぬ歌や詩や年ごろの歌枕に名ある
かきたるところところを書きてまゐらせたりけれ
○源氏物語玉葛巻　手づから川の第一の歌枕

○花鳥余情　歌枕とハ名所の歌をあつめたるをいふ　能因法師
の五代集の歌枕等

○三部の長点

○鶯水閣頭一　点さかなといふを和歌に用ひて点は
瓜哉しといひ以之　点をとる人ある時まされる事と
為すには合格をのべてこれと　俳諧を指す付ける名
をもとす前吟して秋つゆるを名とくる点まつ
にくつまりさきしをかるさを半点といふ

○大極上　新到　新　推中といふ　俳諧點の長点とも云
ねまき長点の句は　西鶴花上すする点を名付
句のとまり出ても打さけられも　野西鶴花ひかれく点は
まことに思ふる心くと　れることなくたえていふしかれ
やかて上へ筆をはなれて一点附たる事の之とき

合点　かつてん　てんをかくる事

そハ新撰六帖なとに めくおほくの人〻各同題を詠出て家〻のあるし
きて和歌八人の家合 合点して 許容せしをしくい之 これハ八人て
点をかけ合点するより出て 辞なきを 衆議の点すしあれは 第二ノ文
の家道に点をむ八合点といふ 是をきこえれ好しといふ点かなり
人の評判して 五一人に集させ 衆議判のめきこえすこ云なり
○拾玉集に 建久二年九月ぬ法経あまて 五百首 左右の法華
おもにまて 其の序に 給ゆる 詩てく 百首 任口反すく
百首にとく まよる てふ 経すしすなり 家の詞をあれり かへつて
序書の料紙に書を 故に かへせ たまりて 二首反にこめ とより
其年 其年を優婆塞 思いて 点とも 合せあくに 御 出つけ
合新続
我もいたる心にあへて了し之 法 深 経も とその光 此
○いまもの 苑 於花 百首 なる 其後 訝 是て 日 頃 より 相思 たれる
人〻 心 紙 とり 持 あく 大事 結 願 序 衆の 君の 申す 百年
首の 家 より なとて ま 其 先 座 人 まく ことされ たり こと

さうしく 第まへり 五百首に 十八首に点 人あひぬるも あへしく
何の やうの ひ かめ ては 持 しめ 其の 中 にまかす

撰集讀人不知事

○耳底記中大かた讀人志らずといふは下賤の人法師の家勅勘の人またハ根本不知なり

結句の文字古今異なる事

○古今以上とまうさるれはまてなき萬葉の字にて
まへハ四三とも有後ハつまり三四ともあつたとへハ古へにハ
四字やまとの字ハ秋やまと乘ハかくおふへし又これらの新
ひハ四言二言と含まる之又古今よりはハ三四といふ歯しと
古歌や多へるのとけ如まし乃おもひ之まつハ二句とも
くさる之理ハなりたまさる然ともそれは遠なるのおもひも古
まさハこれと異なる古萬葉にて中ともなきのおもさなりかり
なりけれは也いきむまひけることのおもひは古今古集も
ともしかやうなる之なることもかくなることのおもひもなしとよ
めるハ六言の字ある也之

短句　秀句

歌の様を打まかせて其秘訣の二ツあり　是歌の体も其二ツあり
短句ハ　有り体にて相応のこゝろを添へて其之歌
句ハいくつにてもよろしきと云

○耳底記上　四　烏丸光広卿　歌ハ秀句なくて様を打たてまゝ也
幽斎　細川幽斎　秀句なくて様をしるしたるはあまり之　云出れ共
古の歌ハあまり秀句にて候　今ハ今の心にて　歌をよまする世
にも秀句を云ふ事ハ短句にてよく　面白き之あるハ
短句の歌ハ面白きとの事之

歌のさまを花実にたとへて

○群書政要序　例棄春華采秋實庶弘茲九德簡而易從

和哥を古今琴に合せて引事

古く和哥を琴に合せて謡ふ事ハ哥を多くうたひてをしるく
うたひて琴にのせて引けるハ又た哥をうたハいふまでもなくこゝろしるし
古哥ハ又其外を[illegible]琴にかけし古哥の事をききわけハ哥とも
[illegible]ハ今の世に諷ひて哥をうたハいふまでも
今こゝに琴に引し古哥にうたハ文章の[illegible]にて哥にハあしきまゝ
しかとく引ものといふ人ゝの詩人や催馬楽ハうたふ[illegible]
私のことをいふといふ[illegible]

○大饒本ハ又いとせちにやさしく[illegible]ハ[illegible]
哥のめでたき中ハ新哥のめでたき事[illegible]
哥の琴をいとめでたく引[illegible]
[illegible]
さるぬこれあるきおもの[illegible]
と引[illegible]
[illegible]

○動天地感鬼神

○古今集真名序　和哥之佳

○風俗通　声音一丁

○荀悦申鑒　君子之所以動天地應神明、正万物而成王
治者、必本乎真實而已

○群書治要

○文選東征賦 曹大家 好正直而不回兮、精誠通於明神

○毛詩序　子夏
故正得失、動天地感鬼神、莫近於詩、先王以是経夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗、

○庾開府集　後周庾集
為晋陽公進玉律秤尺斗升表、二分二至行于司暦之官、九変九成被於和楽之職、足以動天地感鬼神、

○慈恩寺三蔵伝巻五
駆役飛走、感致鬼神、消息陰陽、利安万物、

和歌より杉橋の森生栄ニす

○大鏡第八　高峯寺杉の峯寺の法師なども我てこそあめり中納言ハ
清見寺ふうこにあれ峯寺の八本ゝ杉の枝やうこそをまゐるあつこそ
峯寺八　京まてさせまうの蔵くおもしろうおもやけはまゐられ為めまし
いまはうらなるかハ八幡ニ年ら世のひとられ西いうしうに石清水の
橋の君のいつらひてまうせしられ法師の橋の木かしかれたり法住
ぞかし
ちまやある神の法師の忙ち花もをそろ若も木すおひまにくゝ
とよゝ思ふハ神せ杉まれひさせの行く橋も葉ハ峯寺もあひ居
よいま御く峯寺ハさてあまりおもとそうけまいつし　かとハ八幡宮
の法師まそやまる杉おろうまいつきし待ハと下されハ
さもや仕るへ社つく僻すもいらん

古今集序六人歌仙の評を詩に比喩

○輟畊録巻四 論詩 上畧 国朝之詩称虞道揚范揭焉、范即徳機先生梈、揭即曼碩先生傒斯也、嘗有問於虞先生曰、仲弘詩如何、先生曰仲弘詩如百戦健児、徳機詩如何、曰徳機詩如唐臨晋帖、曼碩詩如何、曰曼碩詩如美女簪花、先生詩如何、笑曰虞集乃漢廷老吏、蓋先生未免自負、公論以為然、

歌仙一双
○十訓抄巻一 近比の歌仙には民部卿定家宮内卿家隆とて
一双にいはれけりそのころ我もくとたしなむ人多かれど
いつれも此二人にハ及ばざりけり

蛙詠歌
住吉社考 住吉の忘草の事 紀淑望 住吉の浦に行て忘草を
たつねけれハ貞女あり 其事を語しを見けれは 持の日利
けるに此歌よみて一首を奉りし 蛙の和に蛙の涯を 持の田に切短
とそこれハ歌也
住吉の浦の忘草とは 此歌よりいふとぞ まくにまさとそれけり
○雑和集 上 廿六丁 十六蛙の讀歌とす

蛍の詠歌
蛍蛙の歌読と思ひしも西王母が世に云ふなり 方秋崖
鷺の倍に云 錦花蒙求中ノ一句といひ又王十朋が梅集
にハ蛙声日の句なり

菅氏家集ニ云

初春此歌ことにハ東よりはそへてもかゝるもと此任に
この歌を漢文字にうつして見れば初陽毎朝来不相還
木棲といふ二句の詩なりしとぞ

○雑和集上 廿六古 菅の家讃とす

歌の本末

本とハ上の句五七五也 三句之末とハ下の句七々の二句
なり二の本末といひ上下を連歌といふ之

○後撰集六 秋中 あまりにこゝろおひ 阿 わかきめとも此なま あ
たちのうちにゆりけるに男の許の方をしのびてまうけ
それハ末ハうちより
讀人しらず
ある時のおもふにも此声をきけハ虫の心のみなりとあるめん

〇百人一首和哥　此百首ハ定家卿秘哥七首の習ひとつなり

五首とハ
人丸　家持　赤人　経信　定頼

七首とハ
喜撰　康秀　躬恒　能因　後京極　行平　忠峯

難題
こゝに詠出かたきことをおもひよりて題とせり 絹十文字なとよみこみ
ぬきいてたる題にて難題とよふもまたそれより轉してよはれ
もなき元旨にてむつかしきことをいふかたを得る難題
といへりまた広きいふにして明らかに小説に古来とも
多くは難題の字をえたり

探題
さくりたい
後撰集十八 雑四 右大臣の家にてかれこれ題をさくりて
歌よみけるに 家といふ文字をさくりて
藤原元真
あかたゝ草の家もわかれにし秋かりの白露

結題
こゝろざしを表裏にいふハとゞくいふ事成ハ是を詞にいふ時にむすぶ也
たいといふ事ハ語路に似たり　作例とすむへきれ家持に
の明月記に見ゆ永二年五月廿日　年頃又京西殿が陵名博士を
むすびて結び延ひことゝするも　結ハ即つゞくとあれバ書
乃意を明らかにしたるを云ヘハ事結題もつゞく題といふべし

○冬くれハ　春くれハ―――相義語等也　初五文字の題ハ
初冬と次て―――此類不審春夏秋冬ともにくれと云也
ハ初冬の事のかぎる也　下略
隠撥
春くれハ居る丈之
措遠
夏くれハふりくさ山
同
花の衣を着し春し
隠撥秋下
君と我いなせ山も秋くれハ

詩歌之作法　并題探歌を賜る事

近ハ歌をいかよ多くハ思ひ煩ひ〳〵之文字ニ奇て思ひ

すかはれても多く其の時日づゝ〳〵に及くしすつ庭の詠哥

序之御製奏ハ長てハと長けりすとすもまかりす上古よりまでの歌の

○懐紙一ニ其更歌作法出和歌不致唯一座之人ニ人々其口より

ら孫ニ次人ニ於次人其題又詠歌次人ニ在其中如其辰謝

九者歌之如何

万葉集云天平十八年正月於太上天皇御在所掃雪和歌左大臣

橘卿應詔作歌一首　峰書　意語　右件王卿等應詔作歌依次奏之時不

記其歌漏失云云此又其事や　又陪席花宴紀歌同之

古抄とかきつけとりて古きを侍るとても不有此義之

勅題之詠始之

眞信公説は指要云 猶説々詞ニハ雅宣ヵ梅の木ニ命して
其の日元輔ヵ月輪といふ所ニ同人まうでたりしに、かの中納
致ヵ許ニ行たりし雅宣ハ元つふまねひしといふ 行りし許
と元輔中納言ニ問ふ時 共ニ哀へて 実方行りと云と
さきの日に梅の花をさいた 隠岐より 元ハ此ニ月の日に元人まさ之けり
雅宣もいつくなる人と思ひ出つれ 作りたるハ 猶と来つりまつり
つりとなり 中りしかたの あかし 秋の元と申けるか
又雅宣集ニ君を崇人 君を見ては まうて来て 御心のまか
りしに紅梅を観とて 丹後詠君孫好宏かをりけるて立
行りそれ
つかはせしかハ 神なるの色の香を言はん 梅にほふたるいる
かく
結句 三郎哀ハきてし 送た立ハ 梅ふかハ 梅るる匂ひとてみる
紅梅となく あるいわれとも 人待申されるにすられ侍る
返事せし 蔵これと 清之

同集云 小一条太政大臣 貞信公 白河院を以花故まの知らずに
御約法師 大條大臣の家の造了 上達部殿上人等と詠同ま
まてよみ歌まの 字書とて 花ヵ事をもふ いまかりまれと
仰せありし かやかりけるとて
白露の色もひとつをいかにして 秋の木のはをちゝにそむらん
人ゝ感歎云々 此を不審 仍大臣公に勅言ニ賜りぬ由
但為登庸元 又作者を相尋も可云者や
此事は指要 四書 をのりる 敏行ヵ のたんうたを 思ひいしるまで
大ハ不便 其首今 又行ハ花詠云々

新続今　　　　　　僧新新続

○戴恩記上　自注　新続の事を集め調まする八人の内に旅修の
ひとまの命の名之　以下の後鳥羽院御代まて言ふ　僧都の新続
為す新続の命君と以下の歌人を新続の事を管之い
まうこそ述

十二月　和歌　　　　月次和歌

○明月記貞永二年十二月廿日　日来　披出物於月次　十二月不足
除目羨摸之　於家忘招神代之　雖不可我除目
尚将中言被射圏摸去又定此方別被見　此而披投疲遣。
此宗清栲山云。東宮宣旨。左右神法之新合。此依原聞看取路此
や未葉家。此入前萎。玉葉以擬此年　御披露　五合　去年
依又加入足近之付繁廣を入云々　以云路　内具　又格階目聡
十而弥撰出同之　今去年此日記文統　日記　中宮大夫進之　日来明八塔被披
豊出見を　三条院修而附在孫合　於出し　今此　同又世有し
入ゆり云々
経営己五級星辰伴住路居婚　古葉集　花　悲々　云々　件結
於古老人之家　皆月
正月　撫行　二日　　陸少納言　林信之　東撒遣　三月　　西庭　右量　四月　　京方
云々　　　　　三条位言歌　　　　　　　　　　　　　　　　　此記　　　　　　　　　　新居

正月 紫式部日記　六月 業平朝臣 凡河内躬恒　七月 源順 江雲　八月 道信朝臣 言
九月 和泉式部 中宮内侍　十月 ……　十一月 ……　十二月 ……
二巻 ……

入内屏風和歌
○明月記建保二年四月六日 入夜中納言来 為下使云々——
——来于禅尼保之仍召勿論 其事 書様 又 云々
屏風調 屏風 其事 云々 又 ……
……
……
……
……
……
……
……

教訓乃和歌詩

平の時頼和歌百首を詠して教戒となし又陸川新藏
元亨も和歌二百首を詠して戒語となす是又其あり
古きも上世には未不足なり 宋の[illegible]詩を作りて
自ら訓蒙のためにて子孫子の二世り 宋の李子[illegible]詩一章
篇を作りて 郷國の教とせし 其時の甫 宋の時呂翰林從
三条西 更に内訓の新詩を撰作り 二国に合歌ひて夫
女の婦教とすれ 子孫ともに皆自らさとすへし

百首和歌

○京極黄門卿定家の百首とは八條院[illegible]に 四季を分て恋雜を加ふる
事の歌は小倉山荘の事也
今案するに是より前に後京極殿良経の百首ありて[illegible]これは八雲
御抄等に録されしと大内にも今[illegible]百首を詠しまして後京極
まては京極百首を詠せられしも[illegible]

○

○八景詩歌作者

○瀟湘八景和歌 後京極殿攝政八雲御抄にあり

○武蔵小野原說 東京[illegible]二条前大納言 法[illegible]也

○近江八景歌 或說に近衛政家公の作なりといへと[illegible]
　[illegible]也

○同 一說 近衛信尹公の作也

○同 武士明應九年八月十三日
　近衛政家公 前関白[illegible]文

子を依　子孫法語して其の時孫せられ候と云ふ和点序
永禄弐年の八月十五日　今出川にて頃日を見え中略
○花ふ子永正三年改永口十郎之ハ永禄五年八月廿日の頃之
との子孫与者よろしかるべし

懐紙

色いし

○角岐也将士膝紙といふ物ハ大昔ハなかりしことの之清和天皇
の御宇紙といふもの多くいで来りといふなり 貞信公記
にも見えたりと撰集抄 御子親王 貞信公ハ延喜帝後乃
人之清和天皇ハ延喜より前之世 役く 古也 申すの御紙
の双紙といふハ一巻なく作者なれまといへとも清和御宇
枕双紙ましまさし 御承度ころりしとのせられたる 今枕
の紙にて存度なりさいふハ今また人の うるふ 智恵といふ
ことの言葉の鎖之清書の草々 新たなる度を造らせ申ふさき
秋したることいふことの之

短冊

短冊ハ上古より其物なれともこれ有事なし 今
世のことく歌を書ハ短冊を用ひ古ハ懐紙ハ自詠ハ書て又古今を
書とふ事なれ 此世事 北条家より始まりて招くに始めといひ出ハ
東山殿の御時の頃此始の歌始りともいへり その始
至極りて一首書くへし

○続草紙一揃の頃名利頃名号和歌之名以れ乎残ずしたり以探
り短冊押紙和歌珠不出郡日記之校猪作浮遊加家子世
頭月兄弟如をも

○直仁親王北六郎近付し僧の召なるの御歌手此
らまゝて出入かくれなまてまことに申しき年ひ見えとも
へき大なる死去なからまでての死骸を送る之事の為ゆ
別さまとて作義の信子年を一勝とて中陪の緒式をそ

さてふるき或は廿斗なるは同じ上古の短冊を見たる
事にのせたりし[illegible]
さあやらぬ事とそ[illegible] うすき人の料となりし[illegible]より
○是をもつし[illegible]は武家の人の是あと常に文を通はせ
その後をもは法師なる此六部十六巻を一部としてやりし
とさはれ是いさしかも人にありけれ
今案に六郎入道の[illegible]猶今までの金銀
の紙之
○時花四季物語百又是をいふことのつきはきまの
つぎ二つ文武を分く上に下の蒔絵をみてく寸
をそいかいて短冊のその一寸相とゑしてき高さを
見るく御かたをゆうきとのえさしといふなまめし

短籍　たんざく

○続日本紀巻十　聖武天皇天平二年春正月丙戌朔辛丑天皇御大安殿宴五位以上晩頭移幸皇后宮百官主典已上陪従踏歌且奏且行引入宮裏以賜酒食因令探短籍書仁義礼智信五字随其字而賜物得仁者絁也義者絲也礼者綿也智者布也信者段常布也

○由岐近猶短尺といふ事むかし法師以前のことなり
説あれとも古来短冊降月のとき短尺中文といふ
時[illegible]たゝて宿信をあふすと申付之　法世
短冊中文の多くてなきを言ふ久しくて家世
かゆしとつてみ清少納言が紀すにぞ短冊の名敷
信降月たしかなく[illegible]之

試筆

羅山文集　随筆 我朝年甫𡧃字者称試筆蓋叢
林家作偈者之所初為手営家先儒学士之文集未見
之也宋六一居士有｜詩唯言試筆之好悪也

木下元高壬申元日試筆詩自注林羅山文集同上元高按劉
静修集有｜詩亦同于欧陽也然皇元風雅有先一初
丁丑新正｜詩皇明文徴有練子寧洪武庚午元日試
筆詩陳白沙集有新年｜｜詩在王弇州四部稿有元日
｜詩八題及春日｜｜詩噫若道春曳博才瞻智不及
之韓子所謂如目也　○風雅亦有雑芸子敬病起試筆詩
○坡仙集引東坡大全集雑説縣□驛｜｜云正月四雛

○泗州　五朝七言律英華有明李夢陽甲申元日―
東方
今案するに東之ハ誠斎の詩ハ元朝に始まる所なり
なりとの前世の宋朝にハ始まらす　但誠斎の詩とに
なれども是ハ正月元日に叢の悪きを識むるの詩なれハ
元日の事なりとて元日に始まる所なりといへとも―
皇朝にて寛永の時に至りて京都北野家の中世よ
早く山の僧徒これを始めたりとそれの時代ハ定かならず
元日に詩を作る事の起ハ未考

辞世
○木下元高詩自注　按貫酸斎有辞世詩見小艸斎詩話
友輟耕録又臨終詩歎李欧陽堅　石即　絶命詞見李
息夫躬又謝康楽集亦有臨終詩
○輟畊録廿六　貫酸斎先生臨終有辞世詩曰洞花幽草結良
縁被我瞞他四十年今日不留生死相海天秋月一般圓洞花
幽草乃先生一妾名

○詩歌を幾首といふ事

○後漢書十四 北海靖王興傳子敬王睦嗣〻〻睦及寝病帝驛馬
令作草書尺牘十首

○前漢書四十五 蒯通傳通論戰國時說士權變亦自序其說凡八十
一首号曰雋永

文書幾通といふ事

○後漢書廿六賈逵傳与簡紙經傳各一通

○文援

宿構

今俗に詩文を前もて作りおき何にてもありけしを懐紙といひ誹諧の格俗にてハ懐句といふ事有是ハ宿構之

○魏志　粲 王粲傳　善屬文擧筆便成無所改定時人常以爲宿構

○什　今詩家にいふの什るといふハ何かしまて或ハ佳——某——なとの類謂之

○詩人玉屑曰詩ニ雅及頌前ニ巻題曰某詩之——陸徳明釋曰謂詩之作非止一人篇數已多故以十篇編爲一巻名之爲——

○齋東俗談巻四

○詩什

○容斎随筆 三筆 陸徳明釈云歌詩之作非止一人篇数既多故以十篇編為一巻名之為什今人以詩為篇什或称誉他人所作為佳什非也

詩魔

詩ノ魔[illegible]同シ二字ノ詞ナレ共 詩[illegible]魔

[illegible]

[illegible]

白氏文集 廿九 主客 忘貴賤不知是誰 客有詩魔者吟哦不知疲

乞公残紙墨一掃狂歌詞

好言俗語　まさこと　たゞこと

昔の言語は雅俗の二つ有　好言俗語之　万葉集以前の持
集なる集中にも人の好みて　詠て名ある　所謂　人麻呂赤人の
歌ハ好言をとり　憶良ハ俗語を用ひられたり　其後の言葉
雅語ハ好言を以て歌　俗語ハ俗言をとる　後世にも有
ても假書記と唱ふの歌の言を俗語をとれる　人も有　聖
見ても　歌学　林子平　李白ハ雅言をこのみ　楽天出て歌ハ
俗語をとれり　常言の好む　本すして　土俗ハたゞうしきて

北山醫話上陳輔之詩話曰王荊公嘗言世間好言語已被老杜
道盡世間俗言語已被楽天道盡余亦嘗謂傷寒好言語已
被朱肱道盡傷寒俗言語已被陶華道盡

国立公文書館
National Archives of Japan